

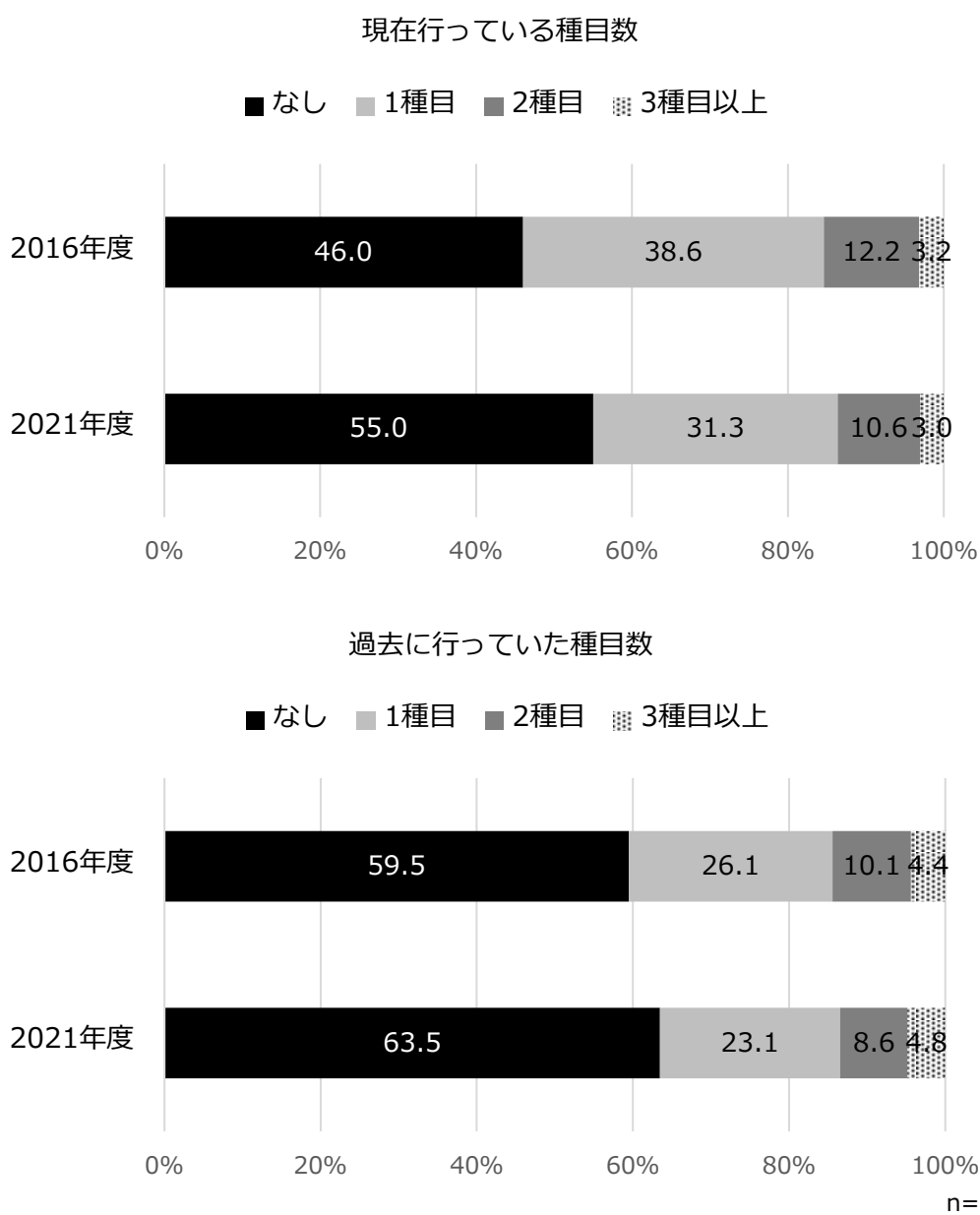
## 2. 調査結果

### 2.1 子どものスポーツ活動

#### (1) 子どものスポーツ活動の種目数

「お子様は小学生になってから、団体(クラブ・教室等)に所属して、以下のようなスポーツ活動を定期的に行ったことがありますか」と尋ね、その回答をもとに、現在行っている種目数および過去(小学生の間)に行っていた種目数を算出した。経年の変化をみると、現在の種目数「なし」が2016年度46.0%から2021年度55.0%へと9.0ポイント増加し、「1種目」は38.6%から31.3%へと減少した(図表1-1)。また、過去に行っていた種目数でも「なし」が59.5%から63.5%へと微増した。

図表 1-1 スポーツ活動の種目数



現在行っている種目数を、性別・世帯年収別・母親の就業形態別・保護者の期待別に分析した(図表1-2)。「なし」の数値に着目すると、性別では男子 48.9% < 女子 61.2%となり、女子のほうがスポーツ活動を行っていない比率が高い。世帯年収別では、400万円未満 69.2%に対して 400～600万円未満 56.1%、600～800万円未満 45.8%、800万円以上 43.1%と差が大きい。笹川スポーツ財団が実施している「子ども・青少年のスポーツライフ・データ」でも世帯年収 600万円を境に習い事の実施状況に違いがみられるという分析結果が出ており(鈴木 2015)、これをおおむね支持する内容となった。

母親の就業形態別に「なし」の数値をみると、正社員・正職員で 45.8%と最も低く、専業主婦で 60.8%と最も高かった。「正社員・正職員」は世帯年収が高い傾向にあるが、その世帯年収をコントロールしても、専業主婦より働く母親の家庭で子どもがスポーツ活動をしている傾向がみられた(図表割愛)。基本属性(p2)では本調査の対象者における就業形態の分布を示したが、スポーツ活動をしている場合に限定して集計しても、母親の約 65%が就業していた。子どものスポーツ活動を考えるにあたっては、現在のこのような家庭の状況を念頭に置く必要がある。

図表1-2で、最後に保護者の期待別にみると、保護者の期待と子どものスポーツ活動の有無には関連があることがわかる。特に母親が「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい」群では、スポーツ活動「なし」が 72.6%に達した。

図表 1-2 スポーツ活動の種目数(属性別)

		(%)							
性別		世帯年収別							
		400万円 未満 (n=465)	400～600 万円未満 (n=558)	600～800 万円未満 (n=463)	800万円 以上 (n=450)				
男子 (n=1,200)	女子 (n=1,200)								
なし	48.9	<	61.2	69.2	>	56.1	>	45.8	43.1
1種目	35.8	>	26.9	21.5	<	33.0		34.8	38.9
2種目	12.0		9.2	7.5		9.1	<	14.0	14.0
3種目以上	3.3		2.8	1.7		1.8		5.4	4.0

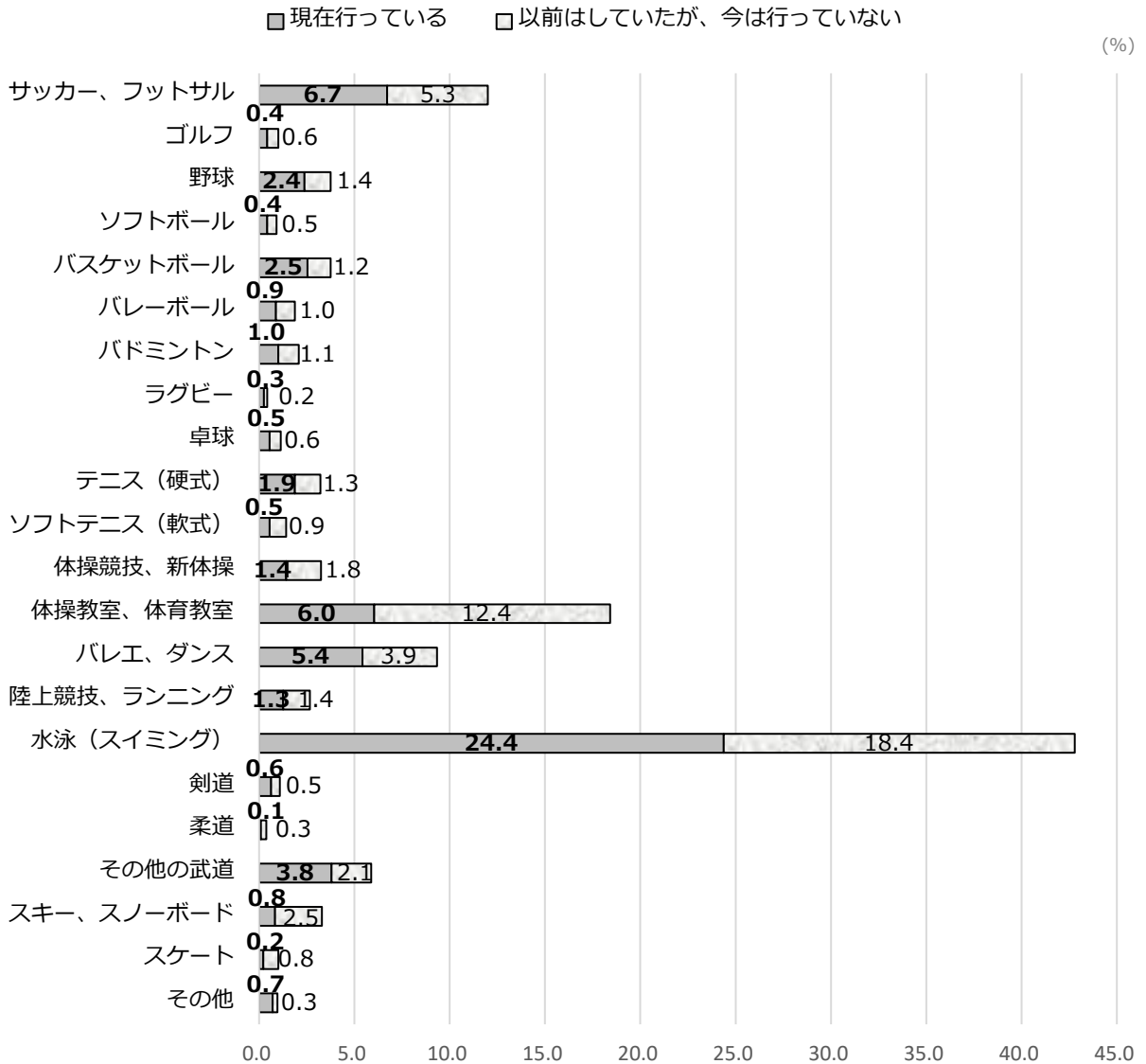
  

母親の就業形態別				保護者の期待別							
正社員・ 正職員 (506)	パート・ アルバイト (777)	専業主婦 (950)		トップレベ ルの選手を めざす (77)	校内で活躍 できる (495)	人並みに できる (1,138)	生活に困ら なければ下 手でもよい (685)				
なし	45.8	<	54.3	<	60.8	29.9	33.9	<	55.5	<	72.6
1種目	36.6		32.3		27.7	39.0	38.8	>	33.4	>	21.6
2種目	13.4		10.7		8.3	20.8	21.0	>	9.1		4.5
3種目以上	4.2		2.7		3.2	10.4	6.3		2.0		1.3

## (2) 子どもが行っている種目

子どもが行っているスポーツ活動の種目について、図表 1-3 に示した。最も多いのは、2016 年度調査と同じく「水泳(スイミング)」である。今回の調査では「現在行っている」と「以前はしていたが、今は行っていない」を合わせると 42.8%であった。ほか、「サッカー、フットサル」「体操教室、体育教室」「バレエ、ダンス」が多い傾向も前回調査と同様であった。

図表 1-3 子どもが行っている種目



最も多い「水泳(スイミング)」について属性別に分析すると、いくつかの特徴がみられる(図表 1-4)。まず学年別にみると、学年が上がるにつれて「以前はしていたが、今は行っていない」が増加し、「行ったことはない」が減少する。いずれの学年でも2割前後の子どもが活動する一方で、高学年になるにつれてやめていく児童もいる様子が見えてくる。

次に世帯年収別にみると、「行ったことはない」の比率は400万円未満70.8%>800万円以上44.9%と、大きな差がみられる。図表 1-2と同様に、600万円を境に比率が大きく異なっている。

最後に居住地域別にみると、「行ったことはない」の比率は10万人未満63.8%>50万人以上51.6%であった。都市部に高年収層が多い点も影響したと考えられるが、子どもの住む地域によって水泳を習った経験にも差がある点は、スポーツ環境を考える上で重要といえるだろう。

図表 1-4 水泳(スイミング)の状況(学年別、世帯年収別、居住地域別)

(%)

	学年別					
	1年生 (400)	2年生 (400)	3年生 (400)	4年生 (400)	5年生 (400)	6年生 (400)
現在行っている	25.8	27.3	26.5	27.3	> 20.3	19.3
以前はしていたが、今は行っていない	7.3	10.8	15.3	17.3	< 26.8	< 33.3
行ったことはない	67.0	> 62.0	58.3	55.5	53.0	> 47.5

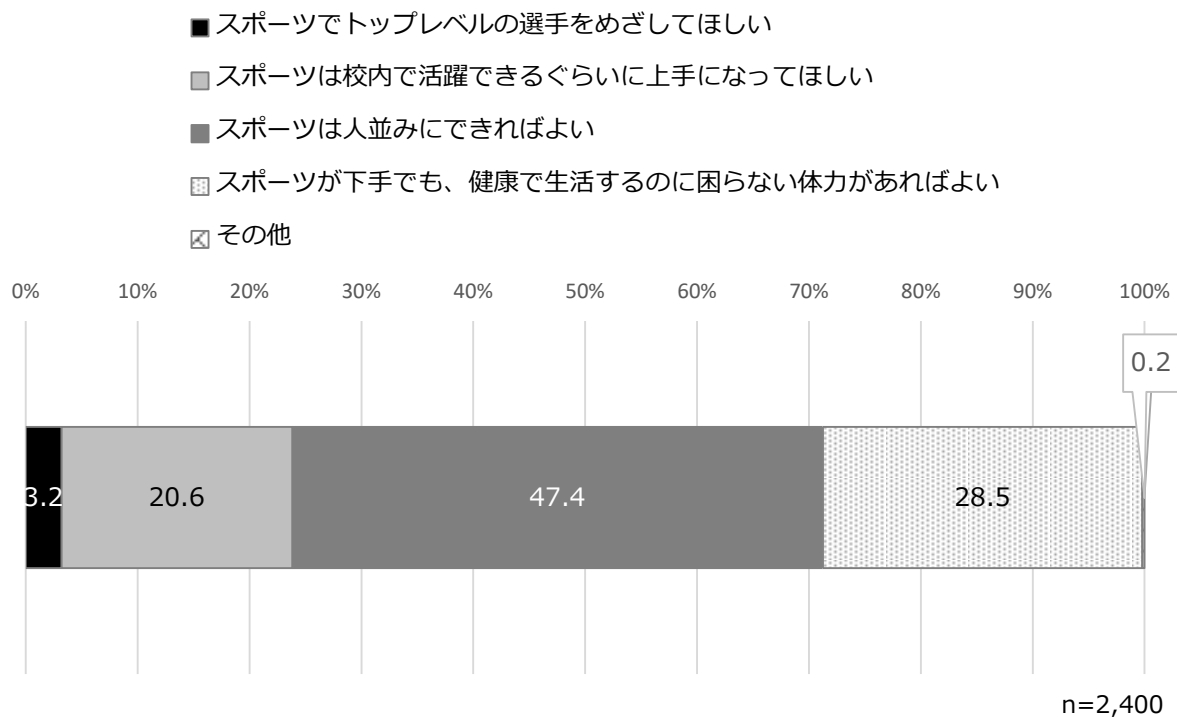
  

	世帯年収別				居住地域別			
	400万円 未満 (465)	400~600 万円未満 (558)	600~800 万円未満 (463)	800万円 以上 (450)	10万人 未満 (558)	10~20 万人未満 (385)	20~50 万人未満 (627)	50万人 以上 (812)
現在行っている	16.1	< 21.1	<< 33.0	31.6	21.0	23.6	23.3	28.1
以前はしていたが、今は行っていない	13.1	17.0	21.4	23.6	15.2	15.6	< 21.1	20.3
行ったことはない	70.8	> 61.8	>> 45.6	44.9	63.8	60.8	> 55.7	51.6

### (3) 保護者の期待

「お子様にはどれくらいスポーツができてほしいと思いますか」と4択で尋ねたところ、「スポーツは人並みにできればよい」が最も多く、47.4%であった(図表 1-5)。続いて「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい」28.5%、「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」20.6%の順に多く、「スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい」は3.2%であった。

図表 1-5 保護者の期待



## 2.2 所属する団体の様子

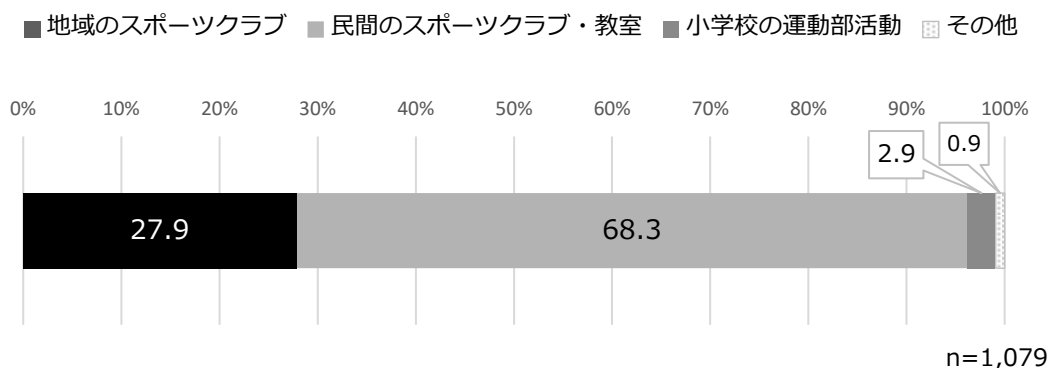
### (1) 所属する団体の種類

子どもがスポーツ活動をしている場合に、所属する団体の種類を尋ねた(図表 2-1)。複数の活動をしている場合には、その後の設問の流れを考慮して「保護者がより熱心に関わっているもの」を尋ねている。全体では「地域のスポーツクラブ」27.9%、「民間のスポーツクラブ・教室」68.3%であった。

属性別にみると、まず性別では男子で「地域のスポーツクラブ」の比率が高い(図表 2-2)。2016 年度調査同様、「地域のスポーツクラブ」には野球・サッカーなど、男子の競技人口が多い種目が含まれる点が影響している。次に居住地域別にみると、「地域のスポーツクラブ」は 10 万人未満 40.6%>50 万人以上 22.3%であるのに対して、「民間のスポーツクラブ・教室」は 10 万人未満 57.2%<50 万人以上 74.4%である。都市部において民間クラブの選択肢が充実している一方で、人口規模の小さい地区においては「地域のスポーツクラブ」が子どもたちにスポーツの機会を提供する重要な存在であることがうかがえる。

さらに保護者の期待別にみると、「スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい」と考える保護者の家庭では、他に比べて「地域のスポーツクラブ」の比率が高いことがわかる。

図表 2-1 所属する団体の種類(スポーツ活動をしている子)



図表 2-2 所属する団体の種類(スポーツ活動をしている子・第 1 子性別、居住地域別、保護者の期待別)

	性別		居住地域別			
	男子 (613)	女子 (466)	10万人 未満 (229)	10~20万 人未満 (172)	20~50万 人未満 (271)	50万人 以上 (399)
地域のスポーツクラブ	32.3	22.1	40.6	30.8	23.2	22.3
民間のスポーツクラブ・教室	64.8	73.0	57.2	65.7	70.5	74.4
小学校の運動部活動	2.1	3.9	1.7	2.3	5.5	2.0
その他	0.8	1.1	0.4	1.2	0.7	1.3

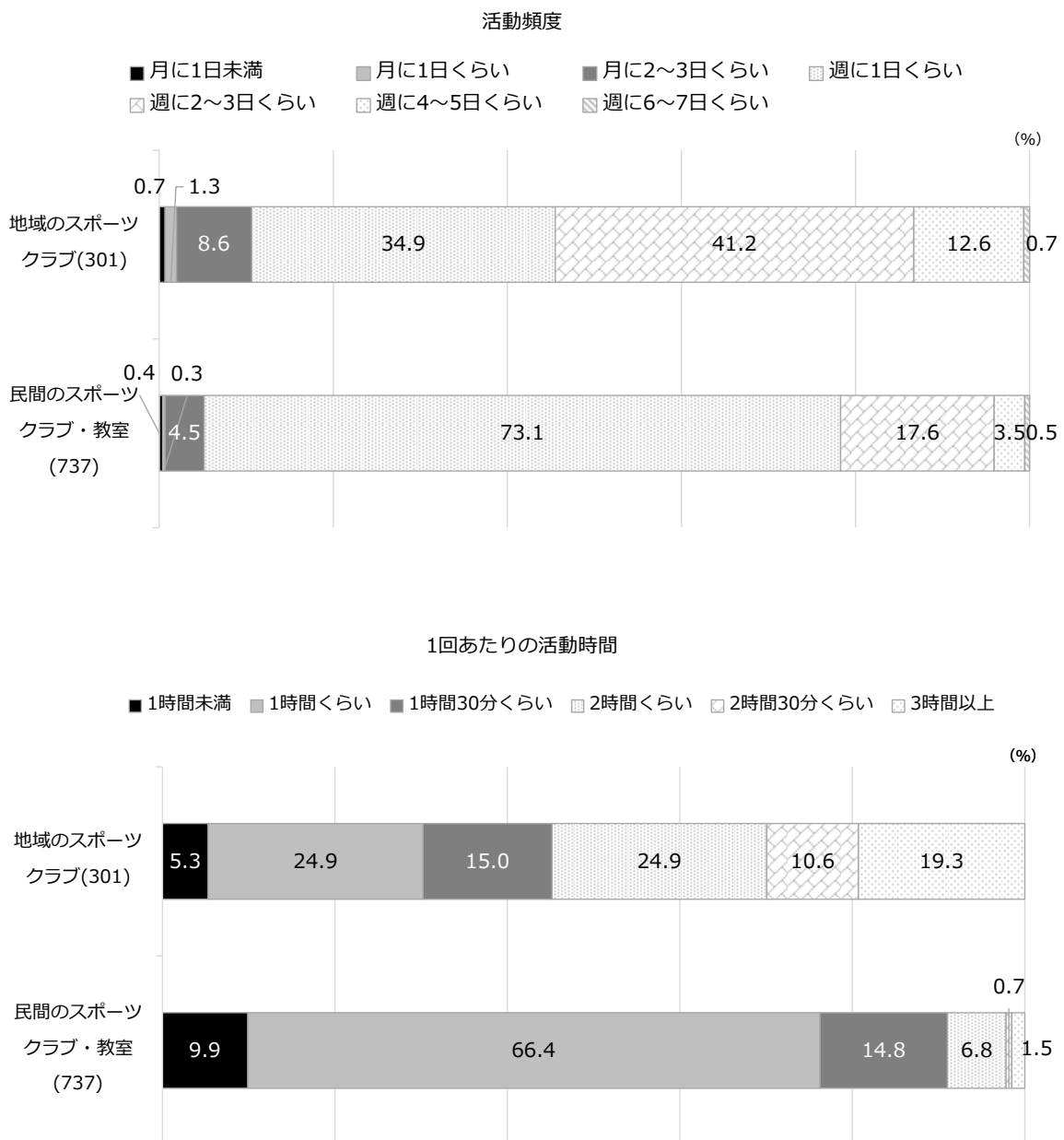
	保護者の期待別			
	トップレベルの選手を めざす (54)	校内で活躍できる (327)	人並みに できる (506)	生活するのに困らなけれ ば下手でもよい (188)
地域のスポーツクラブ	57.4	32.1	24.3	22.3
民間のスポーツクラブ・教室	40.7	65.4	72.3	70.7
小学校の運動部活動	1.9	1.8	2.2	6.4
その他	0.0	0.6	1.2	0.5

## (2) 所属する団体の活動状況

地域クラブと民間のクラブでは、活動状況に差がみられる。図表 2-3 では所属する団体別に、活動の頻度と 1 回あたりの時間を示した。活動頻度をみると、地域のスポーツクラブでは「週に 1 日くらい」34.9%、「週に 2~3 日くらい」41.2%、「週に 4~5 日くらい」12.6%と、頻度の高いクラブが多い。対して民間のスポーツクラブでは「週に 1 日くらい」が 73.1%と大半を占めている。

1 回あたりの時間も同様の傾向がみられ、民間のスポーツクラブでは「1 時間くらい」が 66.4%であるのに対して地域のスポーツクラブでは 24.9%にとどまる。地域のクラブでは「2 時間くらい」24.9%、「2 時間 30 分くらい」10.6%、「3 時間以上」19.3%と、全体的に長時間となっている。

図表 2-3 所属する団体の活動頻度・時間(スポーツ活動をしている子・団体の種類別)



### (3) コロナ禍の活動状況の変化

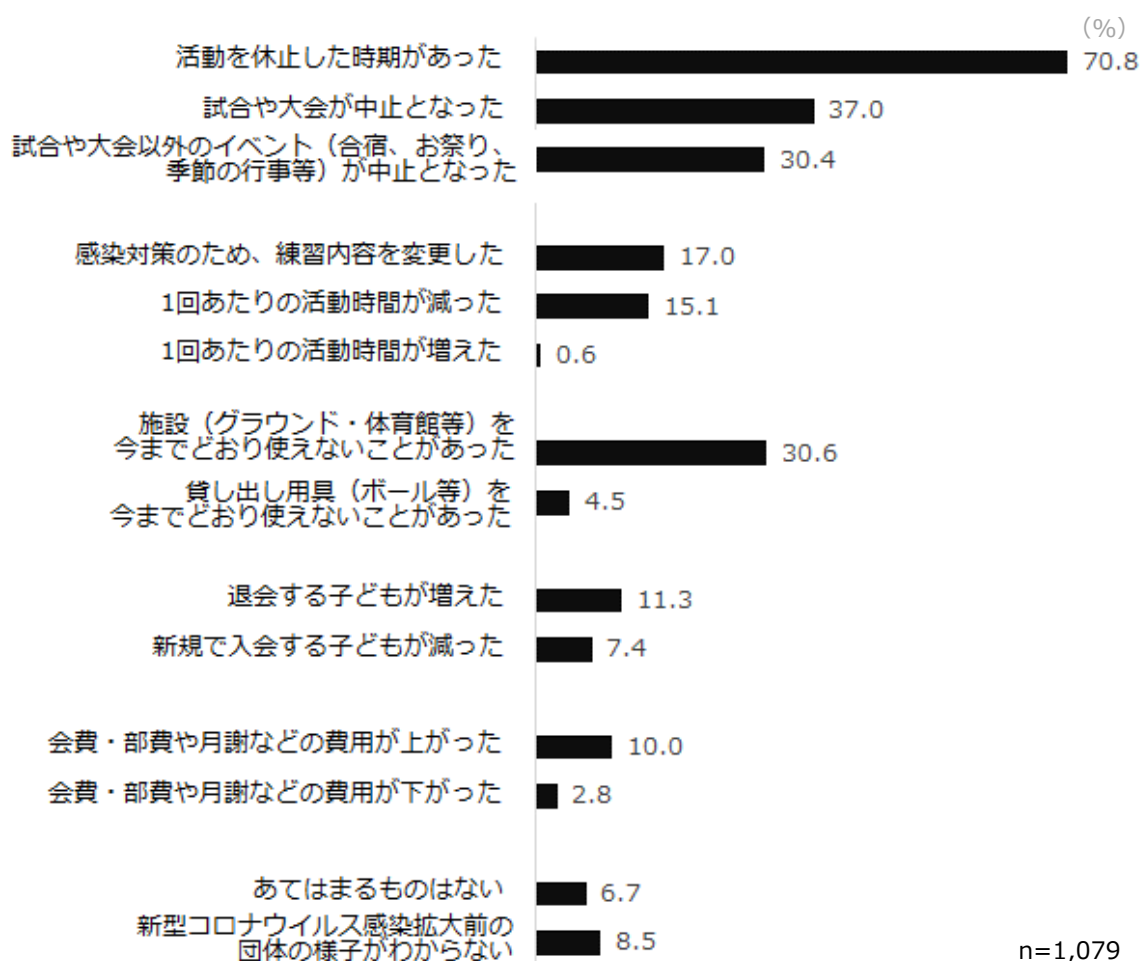
子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における新型コロナウイルス感染拡大以降(2020年3月以降)の変化を尋ねた(図表2-4)。

「あてはまるものはない」6.7%と「新型コロナウイルス感染拡大前の団体の様子がわからない」8.5%を除いた計84.8%が、新型コロナウイルスの影響を受けたと認識している。数値が高いのは活動の休止・中止に関する内容で、「活動を休止した時期があった」は70.8%に達した。ほかにも「試合や大会が中止となった」37.0%、「試合や大会以外のイベント(合宿、お祭り、季節の行事等)が中止となった」30.4%と、保護者が付き添いや運営の補助をする機会の減少につながった可能性がある。

「退会する子どもが増えた」は11.3%、「新規で入会する子どもが減った」は7.4%で、いずれか片方でも選択した母親は15.1%であった。活動の一時的な休止・中止を経験した団体と比べると、活動する子どもの数が減った団体はそれほど多くなかったといえよう。

他の項目では「施設を今までどおり使えないことがあった」が30.6%、「感染対策のため、練習内容を変更した」が17.0%であった。団体によっては、活動場所の確保や練習内容の変更により、日頃の練習においても新型コロナウイルスの影響がみられた。

図表2-4 コロナ禍での変化①(スポーツ活動をしている子)



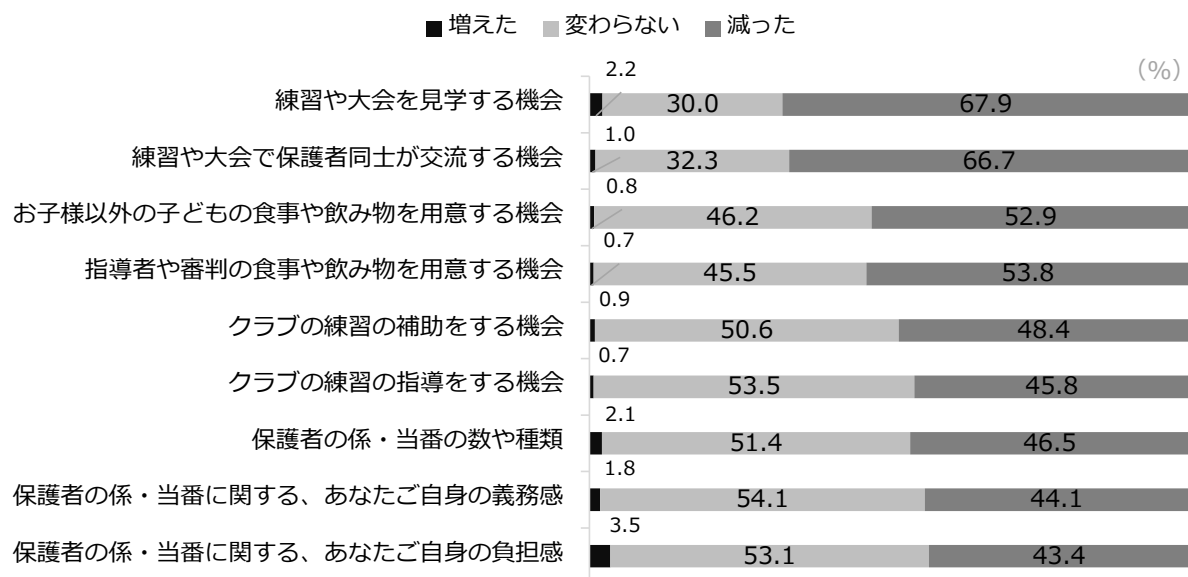
注)複数回答。



同じく子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における保護者の役割を中心に、新型コロナウイルス感染拡大以降(2020年3月以降)の増減を尋ねた(図表2-5)。なお、「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除外して集計しているため、項目によってケース数は異なる。

グラフをみると、いずれの項目でも「増えた」はごく少数である。特に「練習や大会を見学する機会」では「減った」が67.9%と6割を超えた。また、「練習や大会で保護者同士が交流する機会」も、「変わらない」32.3%に対して「減った」は66.7%であった。感染対策の結果、スポーツ活動において子どもの成長を感じたり親どうしのつながりを築いたりする機会が失われた保護者が一定数いることが推察される。「係・当番の数や種類」も「変わらない」51.4%、「減った」46.5%となり、コロナ前後の様子を認識している母親たちの約半数が減ったと回答している。保護者の係や当番に対する「義務感」や「負担感」も、「変わらない」が約半数、「減った」が約45%となり、同様の傾向である。コロナ禍が係・当番の内容を精査する機会となった可能性もあり、平時に戻った時にどのような動向となるか注目される。

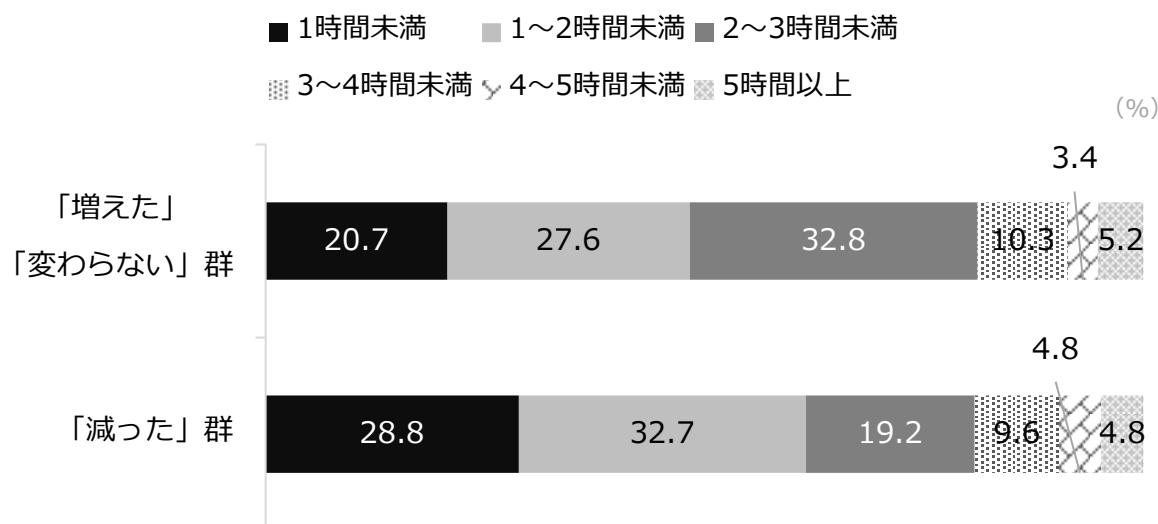
図表 2-5 コロナ禍での変化②(スポーツ活動をしている子)



注)子どもがスポーツ活動をしている母親(n=1,079)が回答。各項目「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除いて集計している。

また、図表 2-5 のうち「練習や大会を見学する機会」が「増えた」「変わらない」と回答した群と「減った」と回答した群にわけて比較した。係・当番の 1 回あたりの時間をみると、2 時間未満（「1 時間未満」「1～2 時間未満」の合計）の割合が「減った」群 61.5%に対して、「増えた」「変わらない」群は 48.3%であった（図表 2-6）。「減った」群で保護者の活動時間が短いことがわかる。係・当番の活動頻度（日数）には差はみられなかった（図表割愛）。

図表 2-6 保護者組織や当番等の 1 回あたりの時間（コロナ禍の変化別）



次に、それぞれの群が、子どものスポーツ活動において担っている役割の個数と、その役割についてやりがいや負担を感じていると回答した項目数を、図表 2-7 に示した。その結果、担っている役割の数、やりがいや負担感いずれも大きな差はなく、当番や係を担当することの多い「練習や大会を見学する機会」が減ったとしても、母親の負担感の軽減ややりがいにつながるとはいえない結果であった。

図表 2-7 1 人あたりのやりがいと負担感を感じる平均項目数(個)

	「増えた」「変わらない」群		「減った」群	
	n	個数	n	個数
担っている役割（全19個）	266	8.2	562	7.9
やりがい（全19個）	265	5.5	562	5.2
負担感（全21個）	266	3.9	562	3.4

注 1) やりがいは、「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」と回答した個数の平均値。

注 2) 負担は、「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」と回答した個数の平均値。

注 3) 役割の内容については図表 3-3-3-4 を参照。

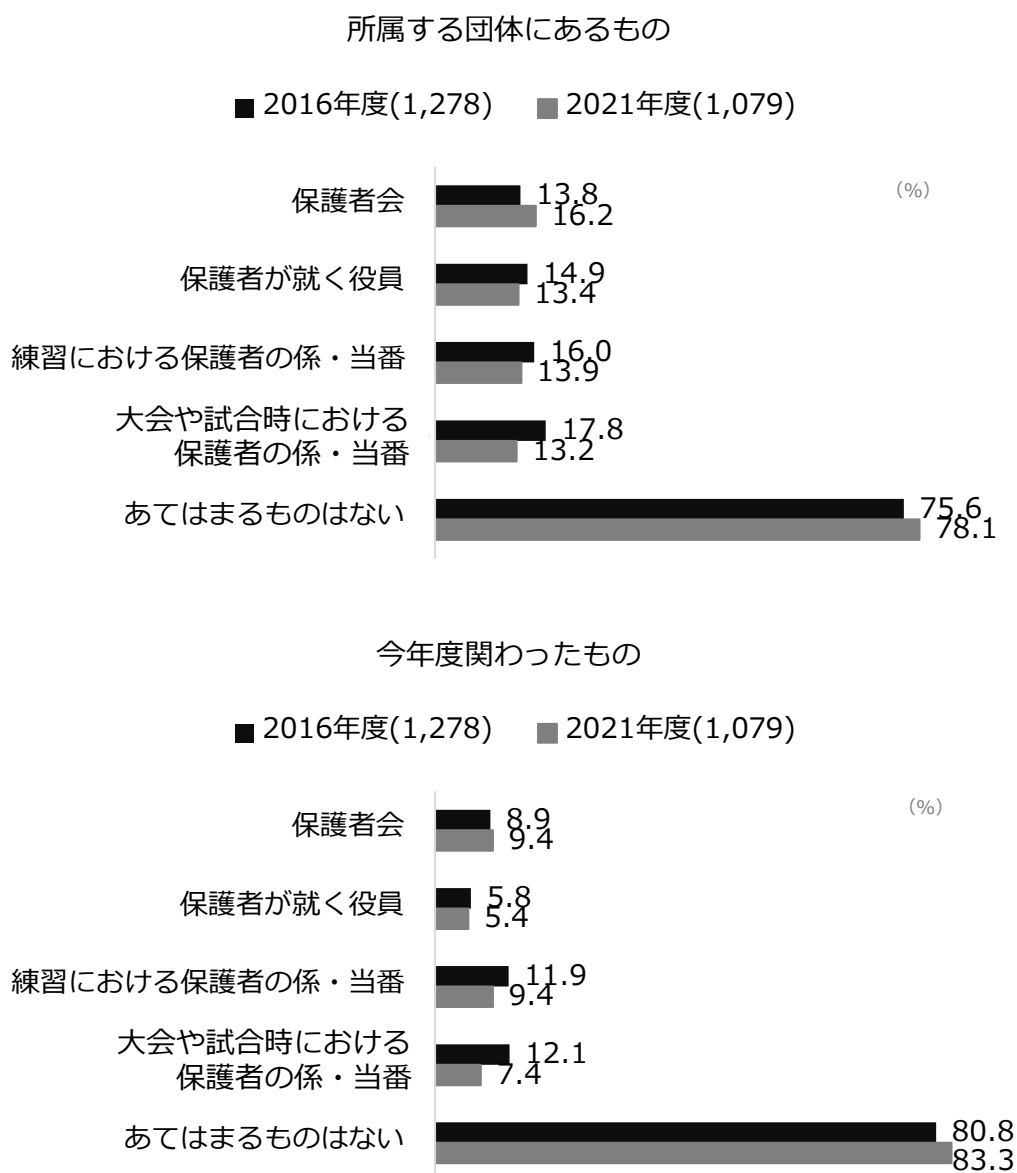
母親が実際に子どものスポーツ活動をみる機会は練習や大会が主となるが、上記のように、その機会が減り、保護者会や役員、係・当番の時間が短くても、母親の負担感の軽減には直接つながらないことが推察される。

#### (4) 所属する団体の保護者組織

子どもが所属する団体にある保護者組織と、そのうち調査年度に母親自身が関わったものを、それぞれ複数回答で選んでもらった(図表 2-8)。「大会や試合時における保護者の係・当番」はいずれも 2016 年度から 2021 年度にかけて減少し、特に母親自身が関わった比率は 2016 年度 12.1%、2021 年度 7.4% となった。

ほかは経年での大きな変化はみられず、所属する団体に該当する組織・役割が「ない」のは 78.1%、母親自身が何も関わっていない比率は 83.3%であった。前項と合わせて解釈すると、コロナ以前から保護者の組織や役割があった団体ではそれらを継続させ、その中での活動時間等が減少したと考えられる。

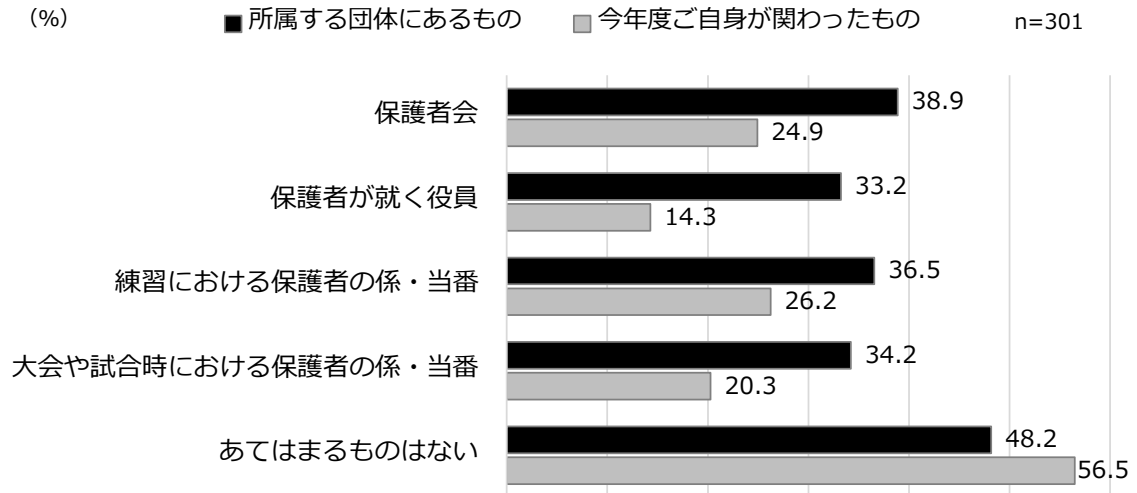
図表 2-8 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子)



注)複数回答。

また、同じ項目を地域のスポーツクラブに所属する場合のみに絞って集計したのが、図表 2-9 である。4 項目いずれも 3~4 割が「所属する団体にある」と回答し、「練習における係・当番」は 26.2%、「大会や試合時における係・当番」は 20.3%、「保護者が就く役員」は 14.3%が、「今年度自身が関わった」としている。保護者の組織も母親たちの関与も、地域クラブではより多いことがわかる。

図表 2-9 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子・地域クラブのみ)



注)複数回答。

保護者の組織や係・当番に関わった母親に、それらの活動の頻度・時間や、引き受けた時の気持ちについて尋ねた。

まずは係や当番の頻度・時間を検討するが、先んじて保護者組織等の有無別に、団体の活動(=普段の練習等)頻度・時間の差をみておきたい(図表 2-10)。保護者組織等のない場合は、団体の活動頻度は「週に1日くらい」が72.1%と最も多く、次いで「週に2~3日くらい」17.8%である。対して保護者組織等がある場合の団体の活動頻度は、「週に1日くらい」21.2%、「週に2~3日くらい」48.3%、「週に4~5日くらい」19.5%となっている。

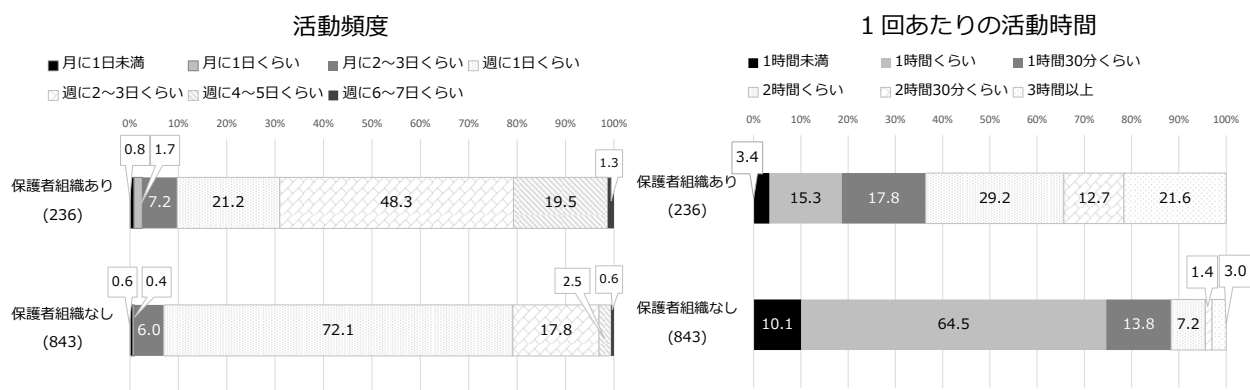
活動時間にも違いがみられ、保護者組織等のない場合では1回あたり「1時間くらい」が64.5%と大半を占めるのに対して、保護者組織等のある場合では分布が散らばり、「3時間以上」が21.6%に達している。このように、そもそも保護者組織等のある場合には、団体そのものの活動頻度が高く、1回あたりの時間が長い傾向にあることがわかる。

それでは、母親自身が保護者の組織や係・当番に関わった頻度・時間を確認したい(図表 2-11)。頻度をみると、「2~3カ月に1日未満」から「月に2~3日くらい」までの合計が92.7%で、団体の活動頻度に比べると少ない傾向にある。これは、大半の母親は自分の係や当番の日、大会や試合の日のみに帯同するためと考えられる。一方で「週に1日」以上活動する母親(「週に1日くらい」~「週に4~5日以上」の合計)が7.2%と、少数ではあるものの高い頻度で団体をサポートしている母親もいることがわかる。

母親の活動時間に着目すると、「1時間未満」27.8%、「1~2時間未満」31.1%と比較的短時間の群もいる一方で、「3時間以上」(「3~4時間未満」~「5時間以上」の合計)が19.4%となっている。一部の母親は、クラブの活動時間に合わせて長時間のサポートを行っていることが推察される。

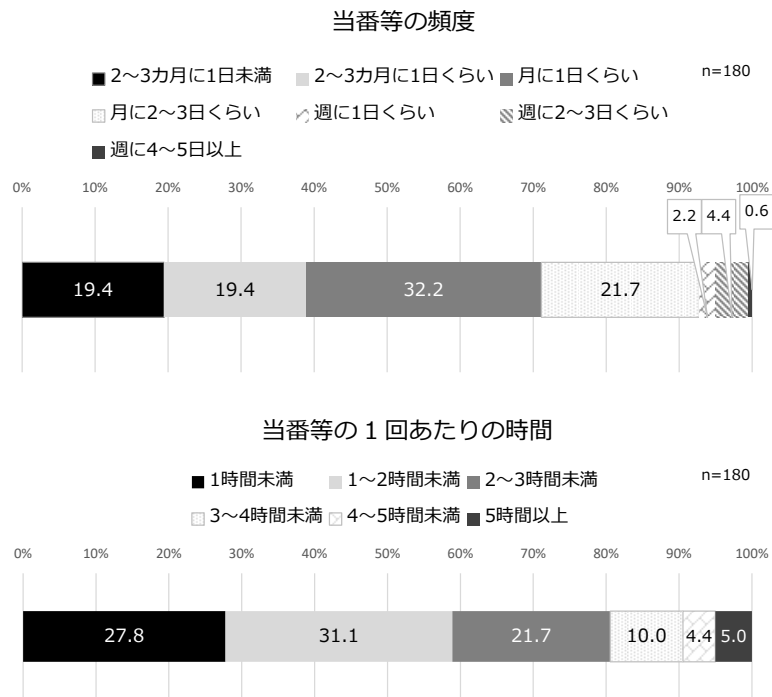
また、引き受けた時の気持ちを3択で尋ねたところ、「保護者会」「練習における保護者の係・当番」「大会や試合時における保護者の係・当番」の3項目では、「積極的ではないが、やってもいいとは思っていた」が多数派で5割前後を占めていた(図表 2-12)。「ぜひやりたいと思っていた」という積極的な層は1割前後である。「保護者が就く役員」では、最も多いのは「できればやりたくないと思っていた」46.6%であった。

図表 2-10 所属する団体の活動頻度・時間(スポーツ活動をしている子・保護者組織の有無別)



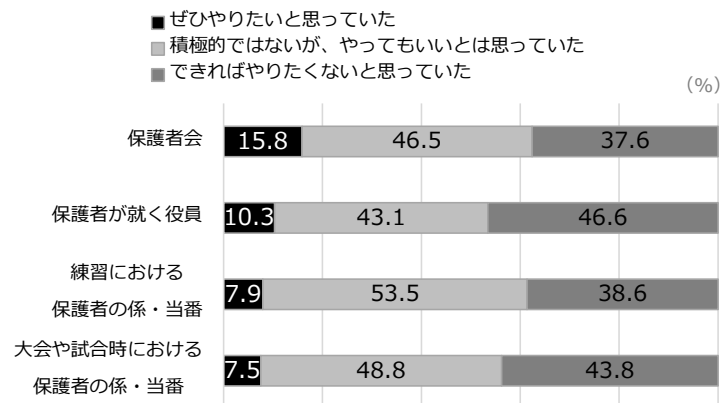
注) 所属する団体に図表 2-8 の 4 項目のうちいずれか 1 つでもある場合を「保護者組織あり」、1 つもない場合を「保護者組織なし」と区分している。

図表 2-11 保護者組織や当番等の頻度・時間(スポーツ活動をしている子)



注)今年度、保護者の組織(図表 2-8 参照)に関わっている母親のみに尋ねている。

図表 2-12 当番等を引き受けた時の気持ち(スポーツ活動をしている子)



注)各項目、現在関わっている人を母数にして集計している。

### (5) コロナ禍の係・当番の変化

所属する団体に保護者の組織、係や当番がある場合に、「保護者の係や当番で、コロナ禍で新たに行っていること/やめたこと」を自由記述で回答してもらった。「新たに行っていること」は具体的に記述があった99件のほぼすべてが、消毒・検温等の「コロナ対策」であった。

「やめたこと」に対しては76件の具体的な記述があった。図表 2-13 には同様の回答が複数みられた内容をまとめている。最も多かったのは飲食物の提供、保冷剤などの共有、掃除といったコロナ対策に関連する内容であった。また、試合や合宿、練習など活動そのものの減少により、保護者の係や当番、付き添いもなくなったとする声もあがっていた。ほかには、保護者どうしの交流の場である親睦会や懇親会、それに伴う準備がなくなったという記述もみられた。

図表 2-13 コロナ禍の係・当番の変化

カテゴリー	回答
コロナ対策	お茶出し
	コーチへの差し入れ・弁当提供
	飲み物の共有・提供
	試合での飲み物当番
	熱中症対策で氷や保冷剤など共有できなくなった。
	床掃除・雑巾がけ
活動の減少	試合
	大会や集会
	合宿
	集団での練習
保護者の交流の減少	見学
	親同士が会うこと
	親睦会・懇親会

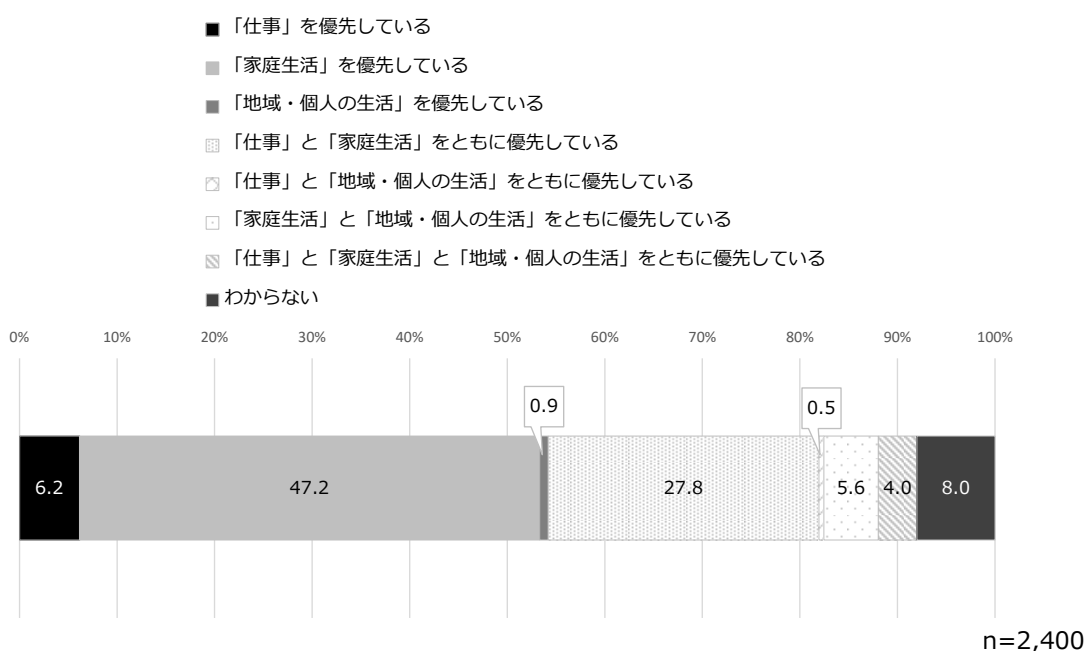
注)表記・表現は基本的に原文(回答)のまま引用している。

## 2.3 保護者の役割

### (1) 母親の生活の優先度

今回、新規の項目で母親に対して「生活の優先度」を尋ねた(詳細は p3 参照)。図表 3-1 をみると、最も多いのは「『家庭生活』を優先している」47.2%であった。次いで「『仕事』と『家庭生活』をともに優先している」27.8%が続く。その他はいずれも 10%未満で、「『地域・個人の生活』を優先している」「『仕事』と『地域・個人の生活』をともに優先している」は 1%未満と、特に少なかった。

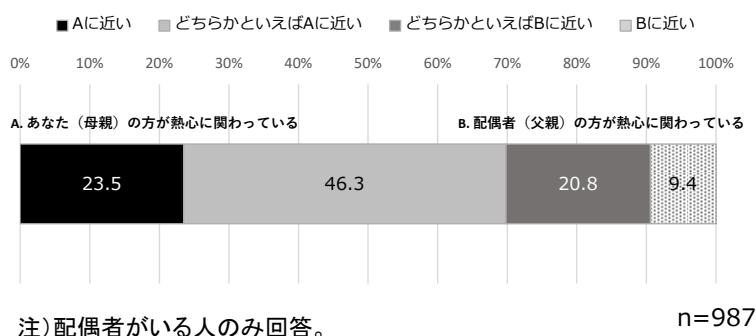
図表 3-1 生活の優先度



### (2) 家庭内の様子

スポーツ活動をしている子どもの母親に対して、家庭内の様子を尋ねた。家庭内では「A.母親の方が熱心に関わっている(A に近い+どちらかといえば A に近い)」が合わせて 69.8%、「B.父親の方が熱心に関わっている(B に近い+どちらかといえば B に近い)」が 30.2%であった(図表 3-2)。子どものスポーツ活動に対しては、母親が中心に関与している家庭が多いことがわかる。なお、世帯年収別・母親の就業形態別などで差はみられなかった(図表割愛)。

図表 3-2 家庭内の様子(スポーツ活動をしている子)



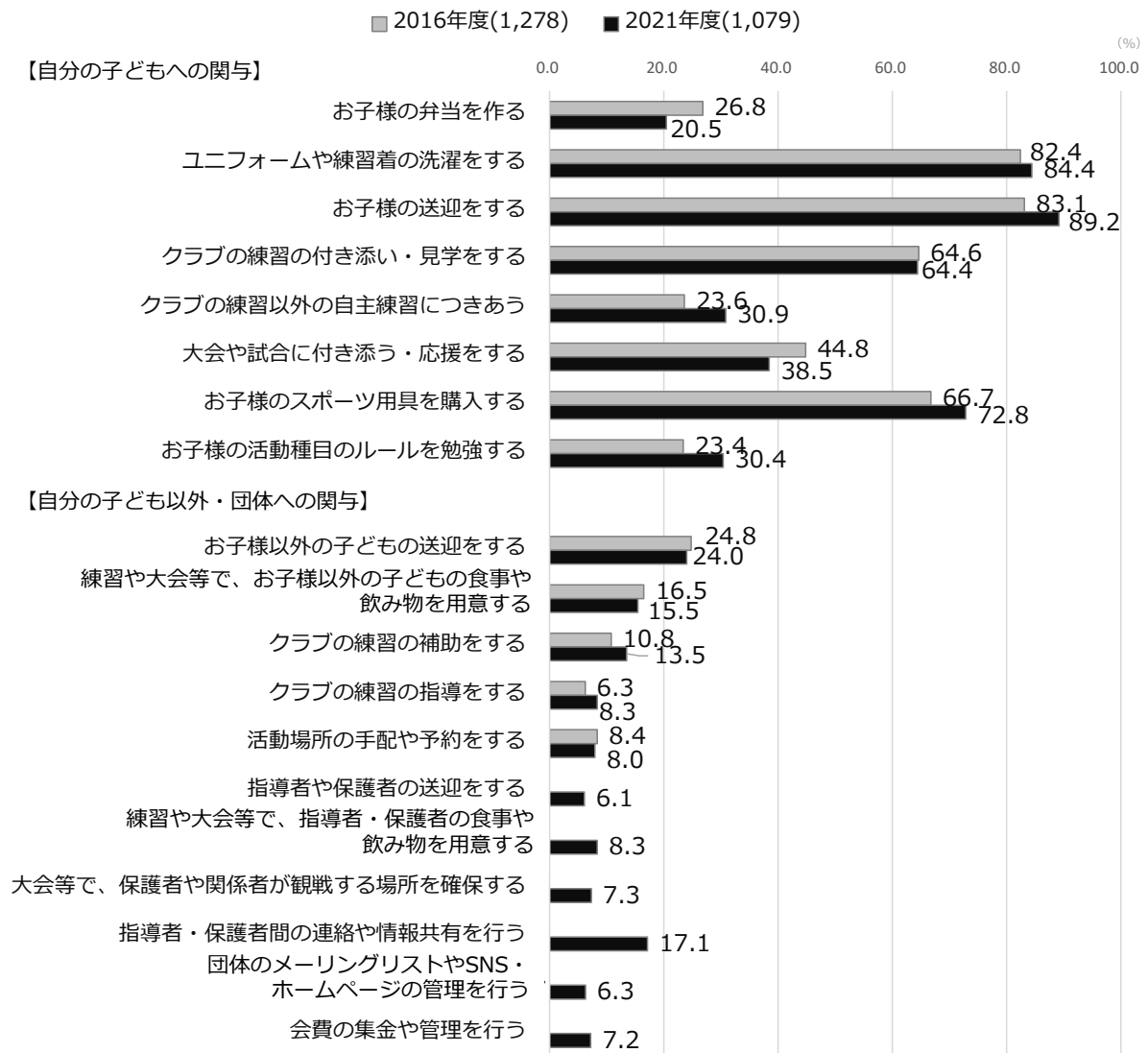


### (3) 母親の関与・父親の関与

子どものスポーツ活動に対する、母親・父親の関与の実態を尋ねた。図表 3-3 が母親の関与、図表 3-4 が父親の関与である。経年変化に着目すると、母親・父親ともに「お子様の送迎をする」が増加し、「大会や試合に付き添う・応援をする」が減少するという共通の傾向がみられる。母親ではほかに、「クラブの練習以外の自主練習につきあう」「スポーツ用具を購入する」「活動種目のルールを勉強する」が増加、「弁当を作る」が減少していた。前節でみたように、コロナ禍で長時間の活動や大会・イベントなどが難しくなり、弁当を作ったり大会や試合を応援したりする機会は減少したと考えられる。一方で、自主練習・ルールの勉強など、自分の子どもに直接かかわる行動は増えている。団体の活動が思うようにできない中で、個々の保護者が子どものスポーツ活動継続のために尽力していた様子が見えてくる。

また、今回の調査では団体全体に関わる活動について新しく項目を追加した(2017年に実施したグル

図表 3-3 母親の関与(スポーツ活動をしている子)

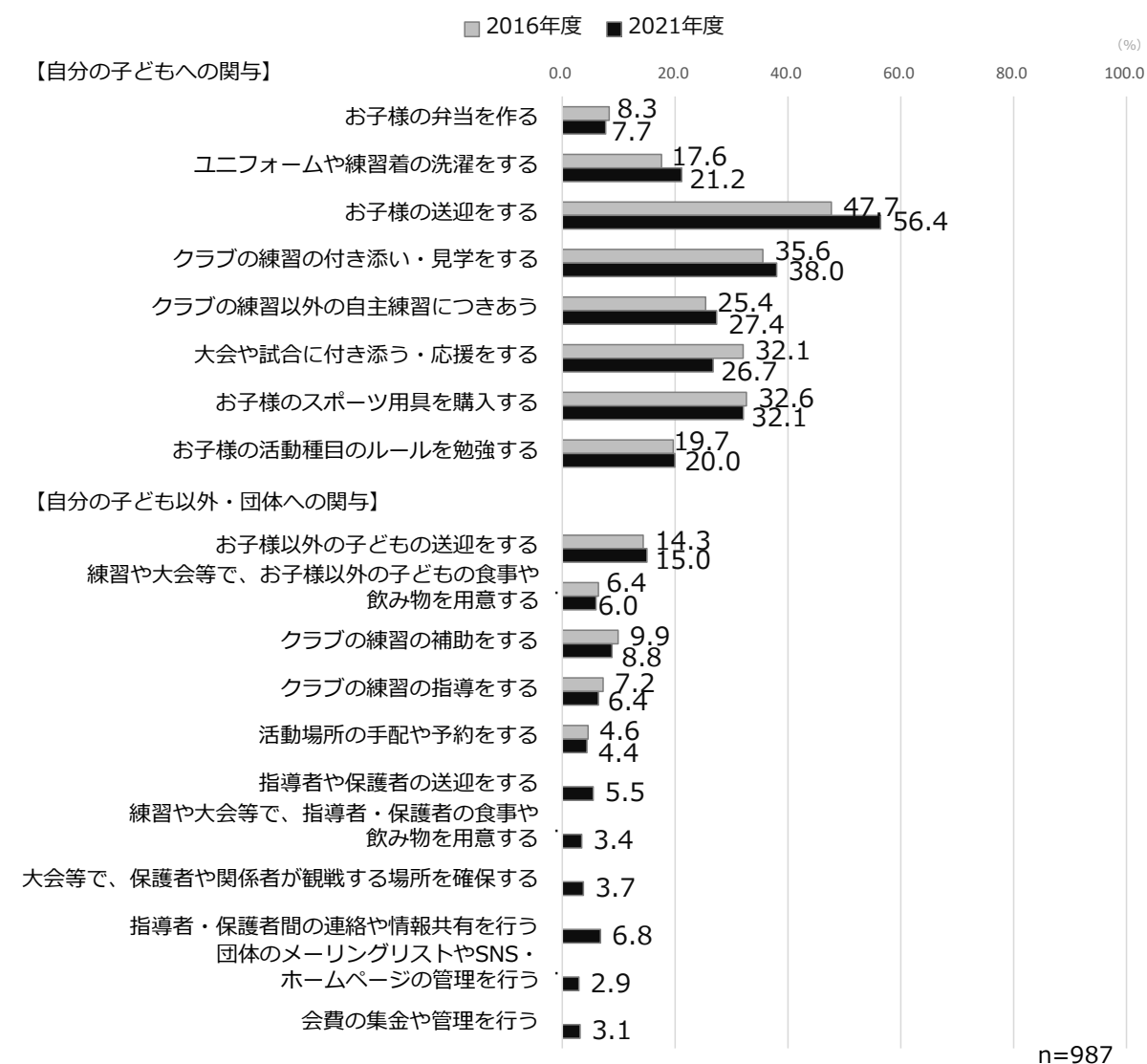


注)「よくする」+「時々する」の%。

ープインタビューで、役員などを務めている母親から聞かれた内容を参考に設定した)。数値をみると、「指導者・保護者間の連絡や情報共有を行う」では母親 17.1%>父親 6.8%と、10 ポイント以上の差があった。「指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」「会費の集金や管理を行う」の 4 項目は、いずれも母親が 6~8%程度、父親が 2~4%程度であった。また、「クラブの練習の指導をする」(母親 8.3%、父親 6.4%)「指導者や保護者の送迎をする」(同 6.1%、5.5%)については、母親と父親でほとんど差はみられなかった。

一方で、「ユニフォームや練習着の洗濯をする」では約 60 ポイント、「お子様のスポーツ用具を購入する」では約 40 ポイント、「お子様の送迎をする」「クラブの練習の付き添い・見学をする」では約 30 ポイント、「お子様以外の子どもの送迎をする」「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意する」では約 10 ポイント、母親が父親の数値を上回る。全体的に母親中心に関与している様子は前回と変わらなかった。

図表 3-4 父親の関与(スポーツ活動をしている子)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

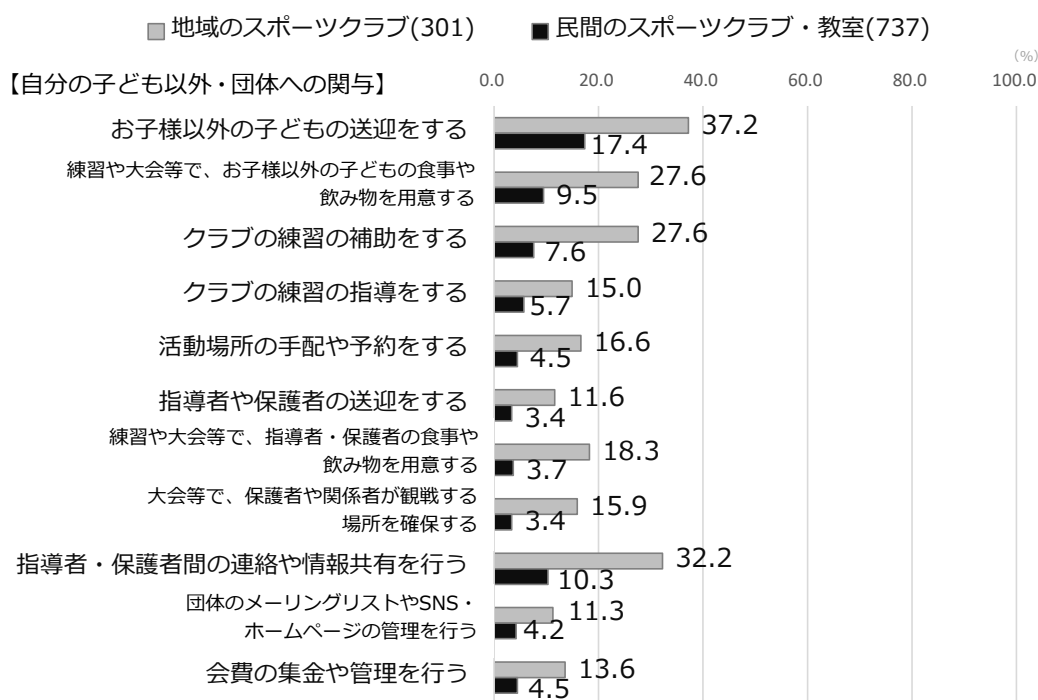
注 2)配偶者がいる人のみ回答。

図表 3-5、3-6 は、母親の関与・父親の関与のうち、「自分の子ども以外・団体への関与」について、所属する団体の種類別にみた結果である。図をみると全体的に「地域のスポーツクラブ」で数値が高く、母親(図表 3-5)では「お子様以外の子どもの送迎」37.2%、「指導者・保護者間の連絡や情報共有」32.2%、「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意」「クラブの練習の補助」27.6%など、3~4 割が関与している内容もある。

父親(図表 3-6)でも同様に「地域のスポーツクラブ」で数値が高く、「お子様以外の子どもの送迎」22.9%、「クラブの練習の補助」23.2%では、2 割以上が関わっている。

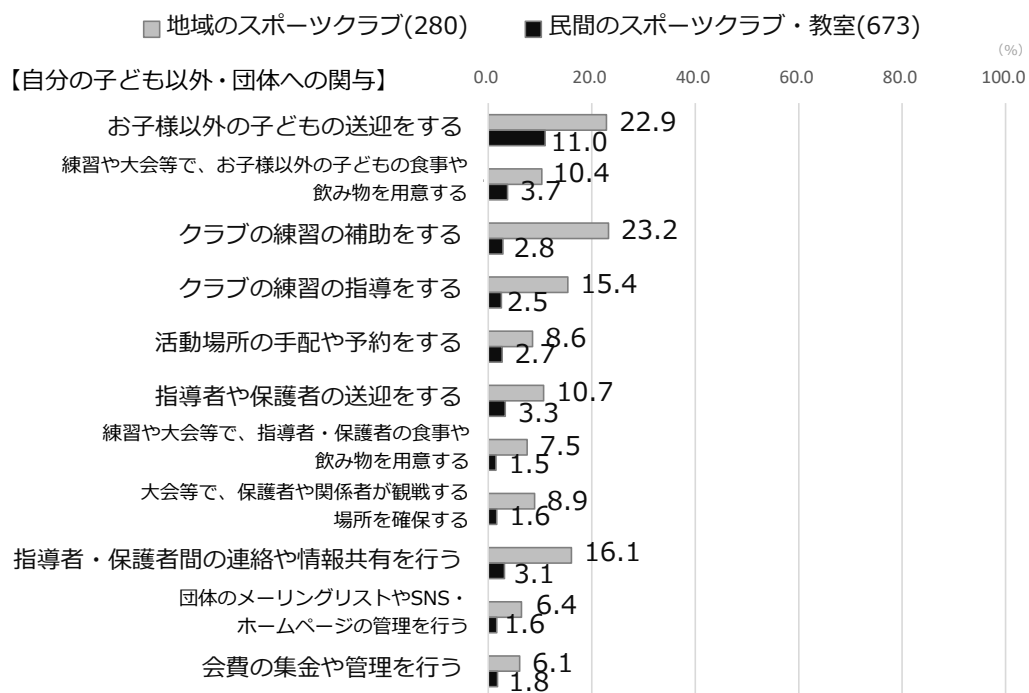
「地域のスポーツクラブ」に絞って母親と父親の差をみると、「クラブの練習の指導」(母親 15.0%、父親 15.4%、以下同)「指導者や保護者の送迎」(11.6%、10.7%)は差が非常に小さく、反対に「お子様以外の子どもの送迎」(37.2% > 22.9%)、「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意」(27.6% > 10.4%)、「指導者・保護者の食事や飲み物を用意」(18.3% > 7.5%)、「指導者・保護者間の連絡や情報共有」(32.2% > 16.1%)は、母親が父親より 10 ポイント以上高い。全体の傾向と同じく、子どもたちのケアにあたる役割は、母親が多く担っていることがわかる。

図表 3-5 母親の関与(スポーツ活動をしている子、所属する団体の種類別)



注)「よくする」+「時々する」の%。

図表 3-6 父親の関与(スポーツ活動をしている子・所属する団体の種類別)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

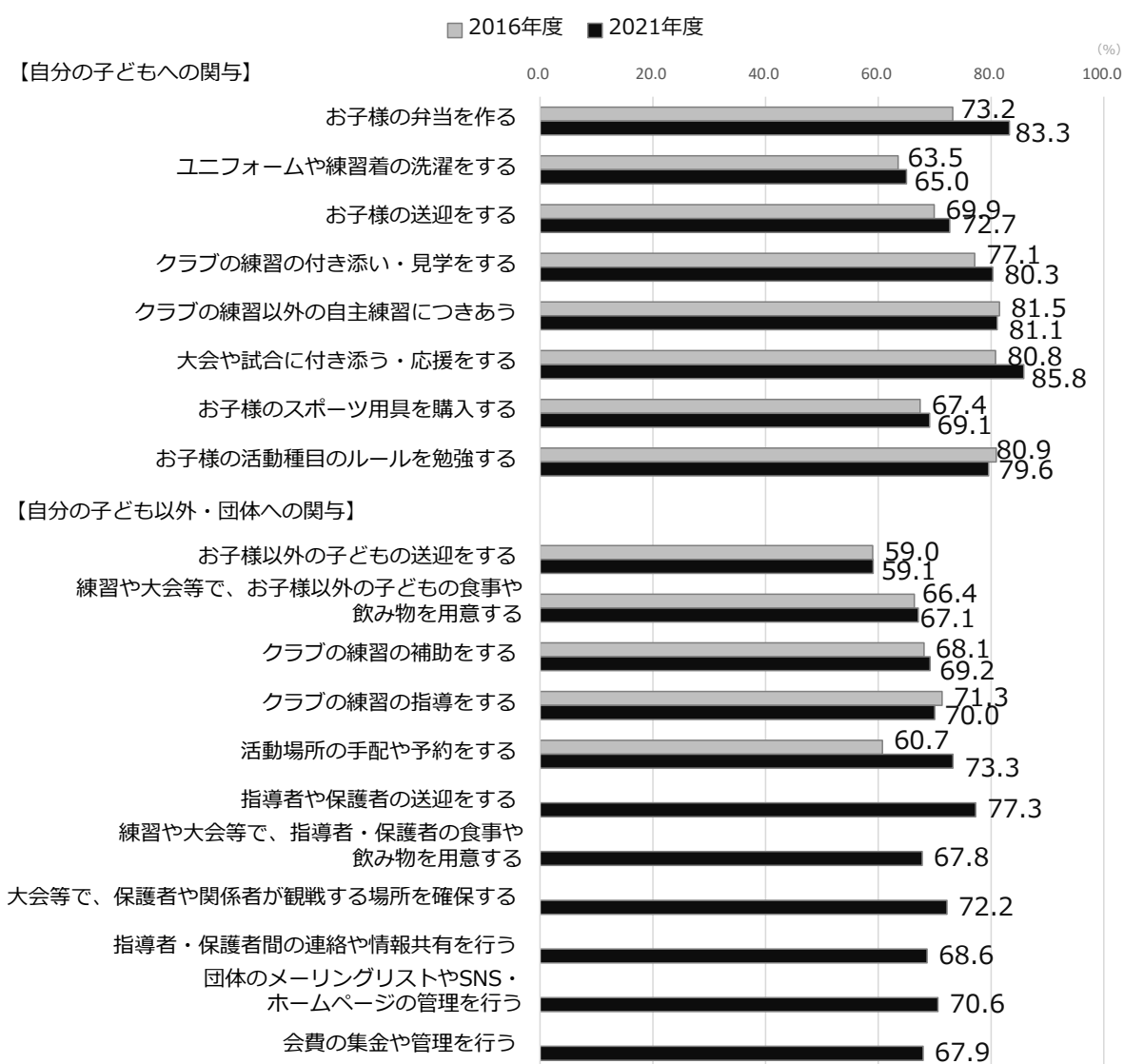
注 2) 配偶者がいる人のみ回答。

#### (4) 母親のやりがい・負担感

子どものスポーツ活動に関与している母親に対して、やりがいや負担を感じているのか尋ねた(図表 3-7、3-8)。やりがいについては全体的に「感じている」の数値が高く、「弁当を作る」「大会や試合に付き添う・応援をする」「活動場所の手配や予約をする」は 2016 年度より 5 ポイント以上増加した。増加の要因として、ひとつには活動機会が減少した分、従来から子どもの活動に深く関与する傾向にあった熱心な保護者がより中心になっていたことが考えられる。また、コロナ禍で保護者が子どもたちの環境をよくすることに対して、よりポジティブな意義を見出せるようになったという心理面での変化も考えられるだろう。

今回の調査で新規項目として追加した団体全体に関与する活動については、一部の母親のみが行っており、最も数が少ない「指導者や保護者の送迎をする」では n=66 である。いずれも 7 割前後が「やりがいを感じている」と回答している。

図表 3-7 母親のやりがい(スポーツ活動をしている子)



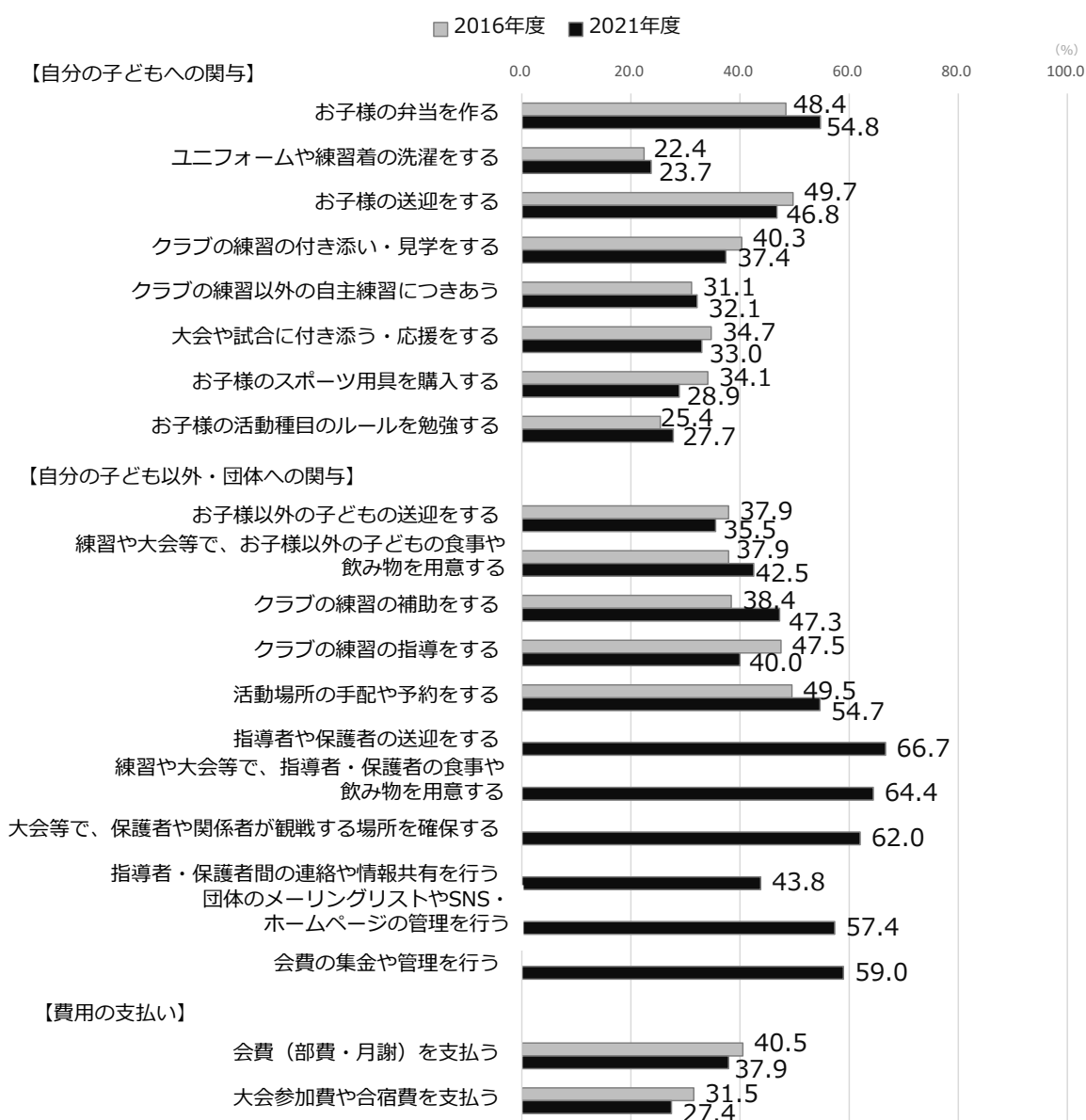
注1) 「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」の%。

注2) それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

続いて負担感の結果である(図表 3-8)。2021 年度の数値をみると、今回新たに項目を追加した「自分の子ども以外・団体への関与」で負担感の高さが目立つ。「指導者や保護者の送迎をする」66.7%、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」64.4%、「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」62.0%、「会費の集金や管理を行う」59.0%、「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」57.4%が、全体の上位 5 つを占めている。団体全体に関わる活動は一部の母親のみが行い、やりがいもある程度高いものの、負担感は大いことがわかる。

前回から尋ねている項目で 5 ポイント以上変化したものをみると、増えた項目は「弁当を作る」(6.4 ポイント増)「クラブの練習の補助をする」(8.9 ポイント増)「活動場所の手配や予約をする」(5.2 ポイント増)、減った項目は「スポーツ用具を購入する」(5.2 ポイント減)「クラブの練習の指導をする」(7.5 ポイント減)であった。細かな数値の増減はあるものの、おおむね 2016 年度調査で負担感が高かった項目は今回も高い傾向がみられた。

図表 3-8 母親の負担感(スポーツ活動をしている子)



注 1)「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

注 2)「会費を支払う」「大会参加費や合宿費を支払う」以外の 19 項目については、それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

母親の負担感について、就業形態別にみた(図表 3-9)。全体的に、正社員・正職員やパート・アルバイトで負担感が大きいことがわかる。特に正社員・正職員では、「お子様の弁当を作る」「指導者や保護者の送迎をする」「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」がいずれも6割前後に達している。

就業形態別に数値が高い項目をみると、正社員・正職員では「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」62.3%が最も高く、次いで「指導者や保護者の送迎をする」62.0%、「お子様の弁当を作る」59.0%と続く。「パート・アルバイト」では「お子様の弁当を作る」54.4%が最も高く、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」がいずれも50.0%である。専業主婦では「お子様の送迎をする」46.8%が最も高く、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」44.7%、「指導者や保護者の送迎をする」41.9%と続く。いずれの就業形態でも「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」は、母親の負担感が高いことがわかる。

図表 3-9 母親の負担感(スポーツ活動をしている子、就業形態別)

	正社員・正職員		パート・アルバイト		専業主婦
お子様の弁当を作る	59.0		54.4	»	30.2
ユニフォームや練習着の洗濯をする	29.4	»	18.6		22.3
お子様の送迎をする	47.9	>	42.4		46.8
クラブの練習の付き添い・見学をする	35.7		34.0		31.3
クラブの練習以外の自主練習につきあう	35.1	>	29.8		27.1
大会や試合に付き添う・応援をする	35.4		31.4		27.4
お子様のスポーツ用具を購入する	31.5	>	26.2		24.8
お子様の活動種目のルールを勉強する	33.3	»	19.8		18.8
お子様以外の子どもの送迎をする	41.3	»	26.0		30.3
練習や大会等で、お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意する	46.9	>	37.1	>	30.3
クラブの練習の補助をする	45.6	»	33.3		33.3
クラブの練習の指導をする	47.5	»	31.0		27.8
活動場所の手配や予約をする	54.0	>	48.3	»	32.4
指導者や保護者の送迎をする	62.0	»	42.9		41.9
練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する	62.3	»	50.0	>	44.7
大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する	53.6		50.0	»	38.2
指導者・保護者間の連絡や情報共有を行う	51.2	»	37.3	»	23.3
団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う	46.3		50.0	»	36.7
会費の集金や管理を行う	53.1	>	46.8	»	27.3
会費(部費・月謝)を支払う	40.9	>	33.8		37.9
大会参加費や合宿費を支払う	31.8	>	26.5		25.5

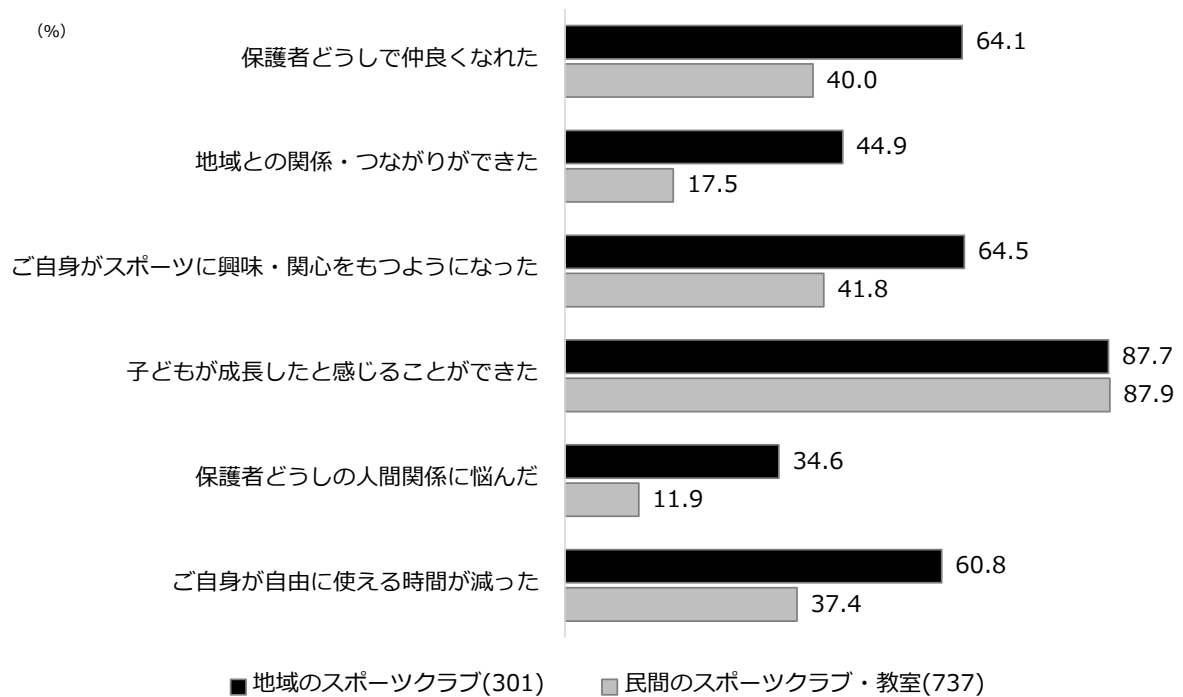
注1) 「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

注2) 「会費を支払う」「大会参加費や合宿費を支払う」以外の19項目については、それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

## (5) 母親自身の変化

子どものスポーツ活動を通じた母親自身の変化について尋ねた。図表 3-10 はその結果を所属する団体別に示したものである。「子どもが成長したと感ずることができた」は地域クラブ 87.7%、民間クラブ 87.9%と、ほぼ変わらない。その他の項目については全て地域クラブの数値が高く、いずれも 20 ポイント以上の差がみられる。「保護者どうして仲良くなれた」等のプラスの変化、「保護者どうしの人間関係に悩んだ」等のマイナスの変化、いずれも保護者の役割が多い地域クラブにおいて、母親たちは自身の変化をより強く感じていることがわかる。

図表 3-10 母親自身の変化(スポーツ活動をしている子・所属する団体別)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。



## 2.4 スポーツ活動をやめた理由・しない理由

### (1) スポーツ活動をやめた理由

子どもが小学生の間にスポーツ活動をやめた経験がある場合に、その理由を尋ねた(図表 4-1)。全体の上位 3 つの理由は「お子様がやめたがっていたから」36.7%、「目標を達成したから」29.4%、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから」28.6%となった。

図表 4-1 には学年別の数値も掲載している(「小学生の間にやめた経験」なので、各回答者がやめた学年まで判別できない点には注意が必要である)。学年単位でリニアな関係性がみられる項目は少ないが、大まかな傾向としては、高学年では「お子様がやめたがっていた」(5年生 43.5%、6年生 41.0%)、「目標を達成した」(5年生 37.3%、6年生 37.4%)、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになった」(5年生 33.9%、6年生 34.2%)など、子ども自身の意向や活動内容の変化が 3 割以上と多くなっている。低学年では、「学校の授業や課外活動が忙しくなったから」(1年生 33.0%、2年生 30.8%)、「通いづらい場所にあったから」(1年生 30.9%、2年生 32.7%)が他学年に比べて高い。2017 年に実施したグループインタビューでは「幼稚園の時に通っていたクラブを続けたかったが、幼稚園が遠く小学生になって送迎が大変になった」という声もあり、推測の域を出ないが、幼児期から児童期への生活環境の変化がひとつの理由となっている可能性がある。

また、「費用の負担が大きかったから」は世帯年収別では 400 万円以下 28.7% > 400～600 万円 16.0%=600～800 万円 16.0% > 800 万円以上 8.8%と、差がみられた(図表割愛)。

図表 4-1 スポーツ活動をやめた理由(学年別)

	全体 (n=877)	1年生 (n=94)	2年生 (n=107)	3年生 (n=133)	4年生 (n=144)	5年生 (n=177)	6年生 (n=222)
お子様がやめたがっていたから	36.7	26.6	« 38.3	> 29.3	34.0	< 43.5	41.0
目標を達成したから	29.4	23.4	> 17.8	18.8	« 29.9	< 37.3	37.4
スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから	28.6	21.3	23.4	27.1	23.6	« 33.9	34.2
送迎や付き添いの負担が大きかったから	26.6	30.9	27.1	27.1	22.9	< 31.1	> 23.0
お子様が他のスポーツに興味をもったから	26.5	33.0	> 23.4	25.6	24.3	< 31.6	> 23.0
学校の授業や課外活動が忙しくなったから	25.9	33.0	30.8	> 24.1	24.3	27.1	> 21.6
活動できる場がなくなったから	22.9	31.9	> 25.2	27.1	> 18.8	23.7	> 17.6
お子様のレベルに合わなかったから	22.6	21.3	25.2	26.3	21.5	20.3	22.1
通いづらい場所にあったから	21.3	30.9	32.7	» 19.5	18.1	< 24.3	» 12.6
新型コロナウイルスの感染が心配だったから	20.5	23.4	25.2	21.1	16.7	< 23.7	> 16.7
指導者や指導方法が合わなかったから	18.1	23.4	19.6	18.0	16.7	15.8	18.0
費用の負担が大きかったから	15.5	20.2	17.8	13.5	13.9	17.5	13.1
保護者の係や当番の負担が大きかったから	10.0	11.7	9.3	6.0	9.7	13.6	9.5
中学受験の準備を始めたから	9.7	7.4	3.7	3.0	< 8.3	< 13.6	15.3
けがや病気で続けられなくなったから	6.3	8.5	5.6	1.5	4.9	7.3	8.6

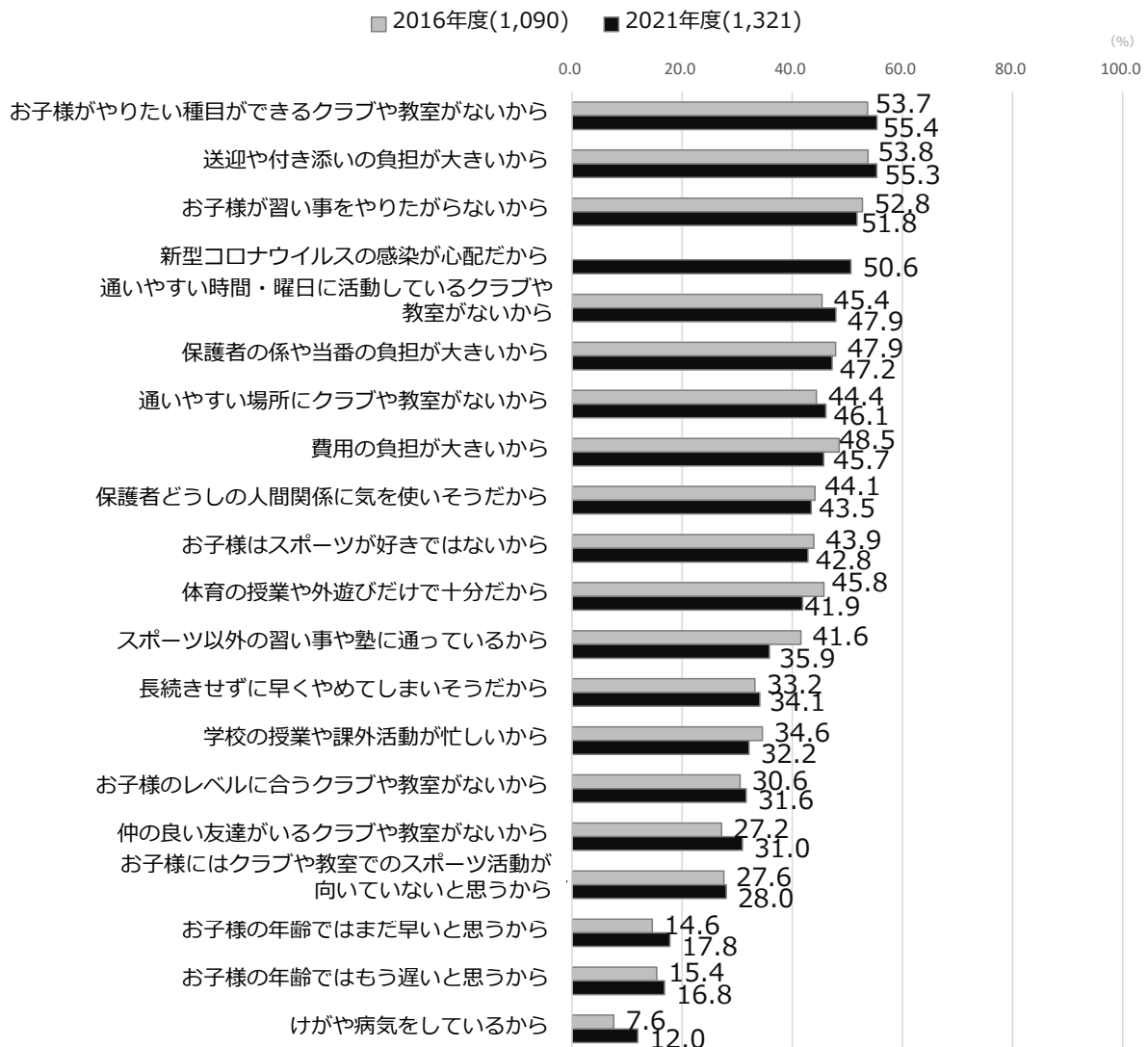
注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## (2) スポーツ活動をしらない理由

子どもがスポーツ活動をしていない場合に、その理由を尋ねた(図表 4-2)。経年で 5 ポイント以上の変化がみられたのは「スポーツ以外の習い事や塾に通っているから」(5.7 ポイント減)のみで、全体としては 2016 年度から大きな変化はみられなかった。保護者からみた子どものスポーツ活動の阻害要因は、年度による変化が少ないものと考えられる。

2021 年度で半数を超えたのは「お子様がやりたい種目ができるクラブや教室がないから」55.4%、「送迎や付き添いの負担が大きいから」55.3%、「お子様が習い事をやりたがらないから」51.8%、「新型コロナウイルスの感染が心配だから」50.6%の 4 つであった。2016 年度に引き続き「保護者の係や当番の負担が大きいから」47.2%、「費用の負担が大きいから」45.7%も 5 割近くに達した。

図表 4-2 スポーツ活動をしらない理由(スポーツ活動をしていない子)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-2 の「スポーツ活動をしない理由」について、2016 年度調査のデータで因子分析をした結果、大きく 4 つの因子が抽出された(宮本 2017)。具体的には、①保護者の負担が理由(係や当番の負担、保護者どうしの人間関係等) ②立地・環境等が理由(通いやすい場所がない、通いやすい時間・曜日がない等) ③子どもの意向・適性が理由(子どもには向いていない、スポーツが好きではない等) ④他の活動が理由(スポーツ以外の習い事・塾、学校が忙しい)の 4 点である。

①保護者の負担に関わる項目について世帯年収別に分析すると、2016 年度調査とほぼ同様の傾向がみられた(図表 4-3)。「費用の負担が大きいから」(400 万円未満 59.9%>800 万円以上 27.3%、以下同)で特に差が大きい。「送迎や付き添いの負担が大きいから」(61.8%>47.9%)、「保護者の係や当番の負担が大きいから」(53.1%>38.7%)、「保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから」(48.1%>31.4%)でも差がみられ、保護者の負担感は、家庭の SES(Socio-economic status, 家庭の社会経済的背景)や保護者の生活状況の影響を受けている可能性が指摘できる。

④の他の活動について世帯年収別に分析すると、「学校の授業や課外活動が忙しいから」では明確な差はみられないが、「スポーツ以外の習い事や塾に通っているから」は 400 万円未満 29.2%<800 万円以上 48.5%と約 20 ポイントの差がみられる。教育の研究においては、特に両親大卒層で子どもが低学年のうちに多様な習い事を経験させ、4 年生ごろから学習塾へと焦点を変えることが、複数の調査結果から指摘されている。そのような先行研究の知見を支持する結果といえるだろう。

②の立地・環境等については、属性別で多少の差異はみられるものの、明確な傾向を見出すことはできなかった。

③の子どもの意向・適性に関しては、保護者の期待別で差がみられる(図表 4-4)。「仲の良い友達がいるクラブや教室がないから」のみ「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい(以下、「校内で活躍できる」群)」37.5%>「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい(同、「下手でもよい」群)」28.2%と、「校内で活躍できる」群のほうが高い。それ以外はすべて「下手でもよい」群の数値が高くなっている。両群の差は特に、「お子様はスポーツが好きではないから」(28.0%<52.9%、24.9 ポイント差)、「お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから」(20.8%<34.6%、13.8 ポイント差)で大きい。

③の理由と保護者の期待との間に直接関連があるというよりは、子ども自身の気質・意向、運動能力などが保護者の期待につながり、このような結果になっている可能性がある点には注意が必要である。いずれにせよ保護者の期待が低い家庭においては、子どもの意向・適性を理由にスポーツ活動から遠ざかる傾向がある。スポーツを敬遠する親子が地域・民間の機会を活用できていない点は、Sport for Everyone の観点から重要な課題として指摘できるだろう。

図表 4-3 スポーツ活動をしない理由(スポーツ活動をしていない子・世帯年収別)

	世帯年収別			
	400万円未満 (322)	600万円未満 (313)	800万円未満 (212)	800万円以上 (194)
費用の負担が大きいから	59.9	49.5	38.2	27.3
送迎や付き添いの負担が大きいから	61.8	57.2	53.8	47.9
保護者の係や当番の負担が大きいから	53.1	49.8	46.7	38.7
保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから	48.1	49.8	41.5	31.4
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから	29.2	34.2	39.6	48.5
学校の授業や課外活動が忙しいから	33.9	28.1	33.5	36.6

注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-4 スポーツ活動をしない理由(スポーツ活動をしていない子・保護者の期待別)

	保護者の期待別		
	校内で活躍できる (n=168)	人並みにできる (n=632)	生活に困らなければ 下手でもよい (n=497)
お子様はスポーツが好きではないから	28.0	39.4	52.9
お子様が習い事をやりたがらないから	45.8	53.2	53.5
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから	37.5	31.6	28.2
長続きせずに早くやめてしまいそうだから	32.1	32.4	37.4
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから	20.8	24.7	34.6

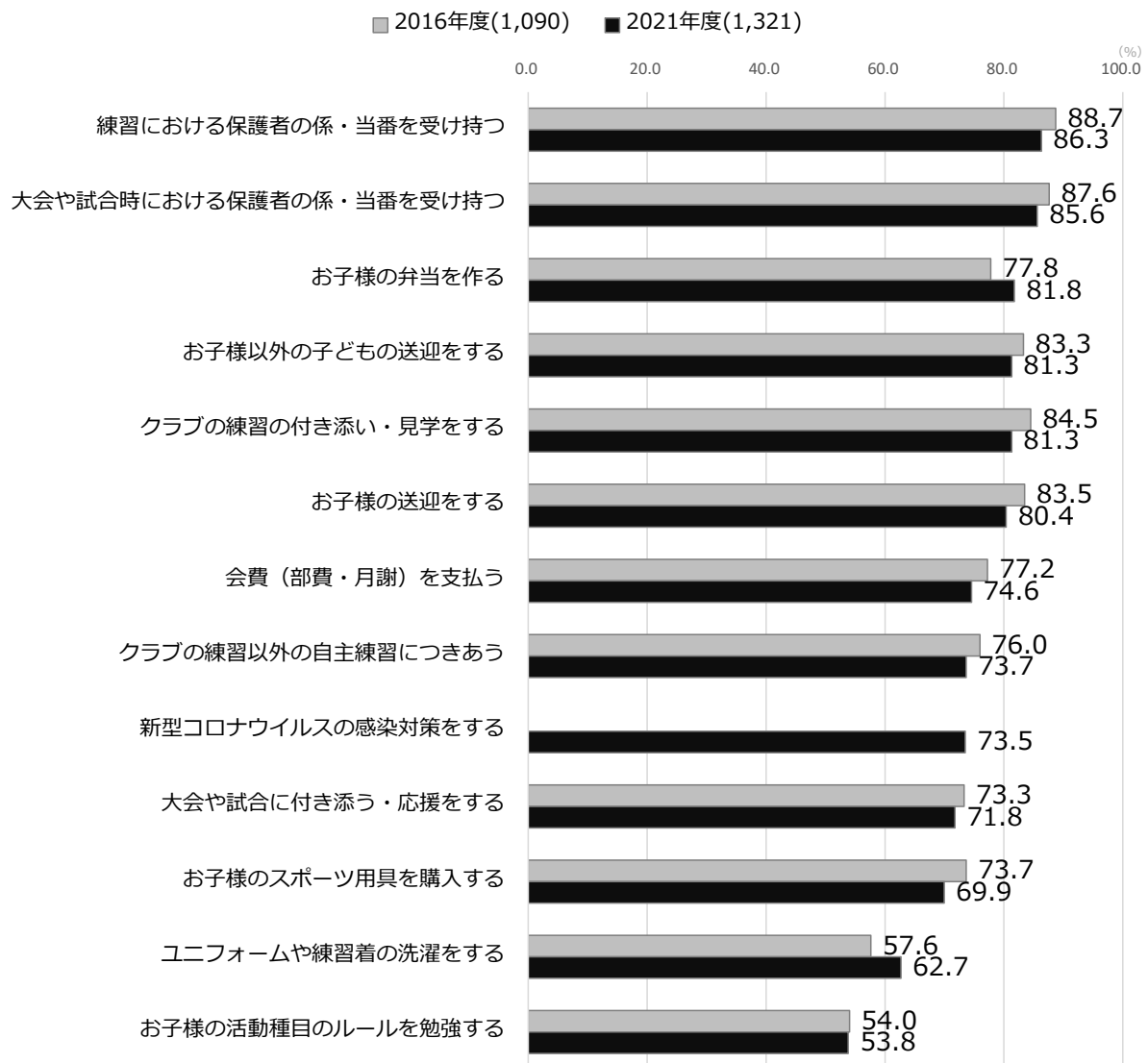
注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

### (3) 母親の負担感

子どもが現在スポーツ活動をしていない場合に、「もしこれからお子様が団体(クラブ・教室等)に所属してスポーツ活動をするようになったら、あなたご自身はどれくらい負担を感じますか」と、状況を想定した質問をした(図表 4-5)。2016 年度と比較して目立った数値の変動はない。「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」がいずれも 85%程度と、最も高くなっている。図表 4-6 では 2021 年度の数値の詳細を示したが、「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」は「とても負担に感じると思う」だけでも約 55%と半数を超えていて、スポーツ活動をしていない母親にとっての負担感が高い様子がうかがえる。

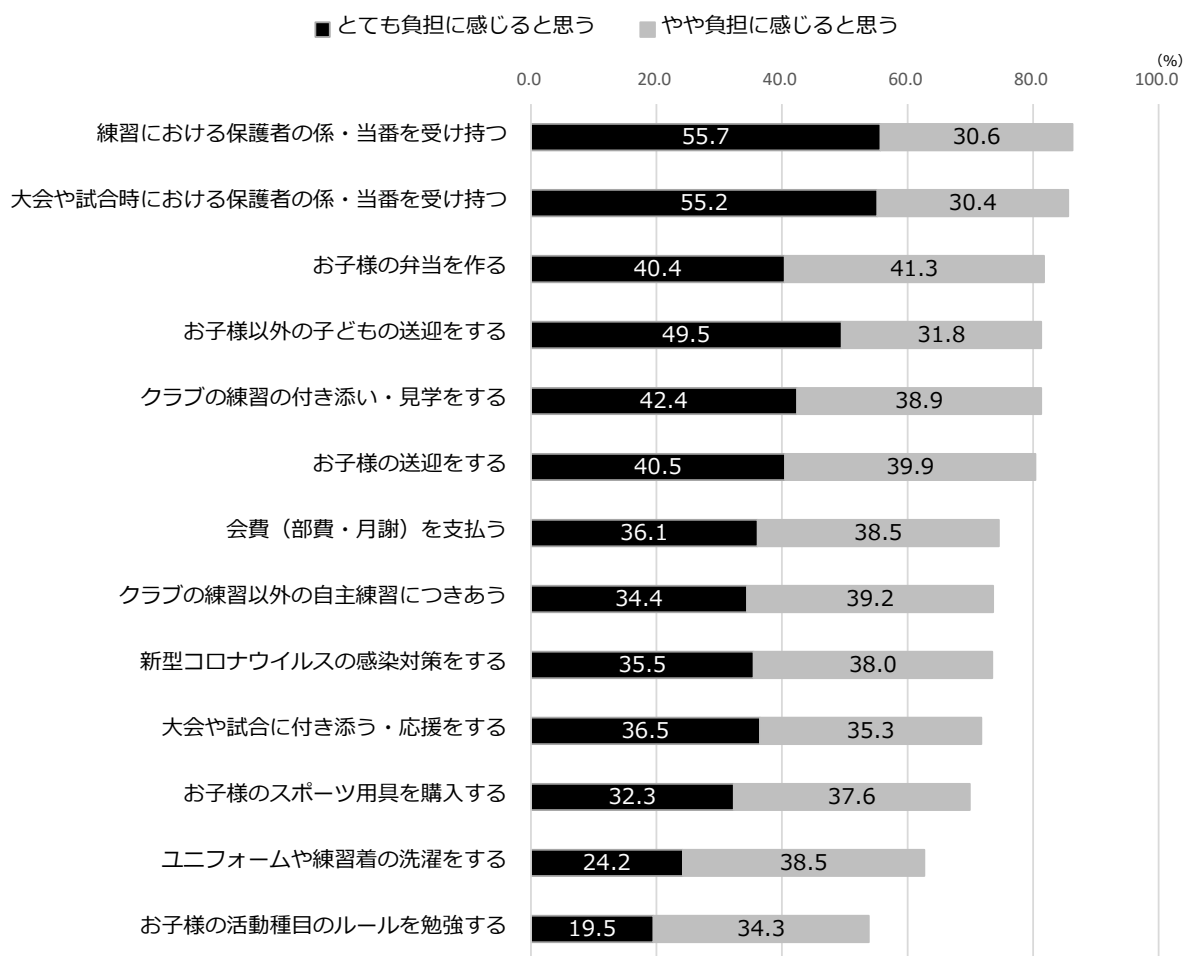
図表 3-7、3-8 でみたように、スポーツ活動に関与する母親は、ある程度負担感があるものの、やりがいにも支えられていた。しかしスポーツ活動をしていない子どもの母親にとっては、自身が関与する場合の負担感が非常に大きく、そのような意識は 5 年前からほぼ変化がみられないことがわかった。

図表 4-5 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-6 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



n=1,321

母親がイメージする負担感は、ライフスタイルによっても異なる。図表 4-7 をみると、全体的な傾向としては「『仕事』を優先している」母親で負担感が高く、「『家庭生活』と『地域・個人の生活』を優先している」や「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』を優先している」母親の負担感は低い。特に差が大きいものに注目すると、「お子様の活動種目のルールを勉強する」「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」で、「仕事」を優先する群と「仕事、家庭生活、地域・個人の生活」を優先する群との間には、26.6～28.8 ポイントの差がある。

母親のライフスタイルは当人の価値観だけではなく、家庭をめぐるさまざまな状況の影響を受けるものと考えられる。地域や個人の生活の優先度をあげられる母親はともかく、そうではない母親・家庭にとって、子どものスポーツ活動における保護者の負担感がより高くなっていると推察される。

図表 4-7 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子・生活の優先度別)

	「仕事」 (n=88)		「家庭生活」 (n=591)		「仕事」と 「家庭生活」 (n=358)		「家庭生活」と 「地域・個人の生活」 (n=77)		「仕事」と 「家庭生活」と 「地域・個人の生活」 (n=46)
お子様の弁当を作る	45.5		42.1		44.4	>	35.1	>	28.3
ユニフォームや練習着の洗濯をする	31.8	>	24.0		23.7		24.7	»	13.0
お子様の送迎をする	52.3	»	40.8		40.8		37.7		39.1
クラブの練習の付き添い・見学をする	55.7	»	43.3		43.6		39.0		37.0
クラブの練習以外の自主練習につきあう	47.7	»	35.5		33.8	>	28.6		28.3
大会や試合に付き添う・応援をする	47.7	>	38.9		36.0		31.2	>	23.9
お子様のスポーツ用具を購入する	45.5	»	31.3		33.8	>	27.3		26.1
お子様の活動種目のルールを勉強する	35.2	»	18.3		18.7	>	13.0	>	6.5
お子様以外の子どもの送迎をする	56.8		54.7		50.6	»	40.3		39.1
練習における保護者の係・当番を受け持つ	63.6		60.6		59.5	»	49.4	»	37.0
大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ	61.4		60.2		59.5	»	48.1	»	32.6
会費(部費・月謝)を支払う	48.9	»	35.2		36.6		37.7	>	30.4
新型コロナウイルスの感染対策をする	39.8		37.7		35.5		31.2	>	23.9

注)「とてもあてはまる」の%。

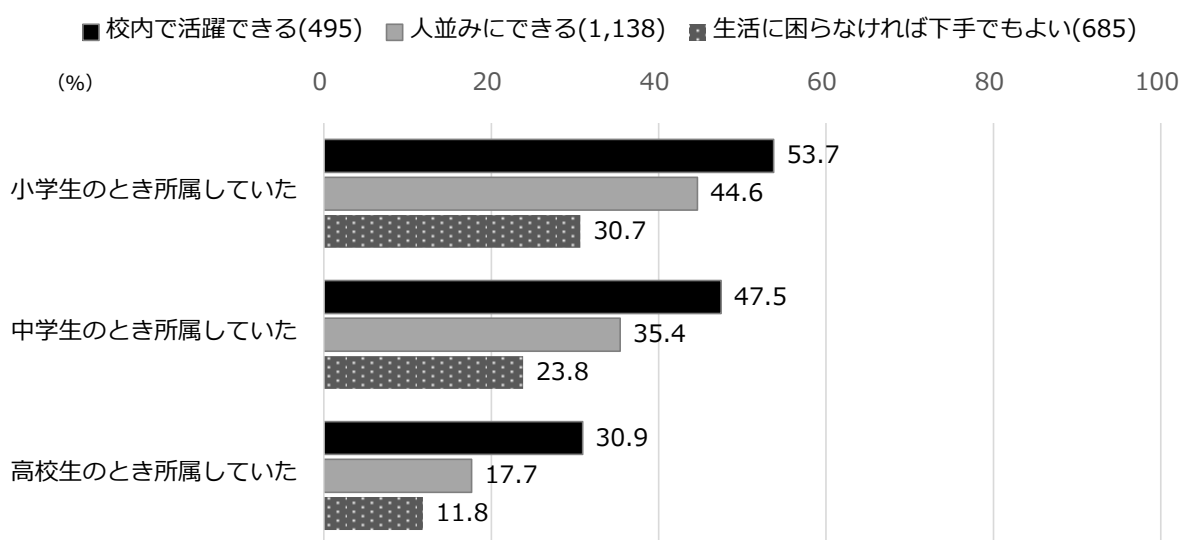
## 2.5 母親自身が子どもの頃のスポーツ経験

### (1) 母親自身のスポーツ経験

母親自身が子どもの頃に、スポーツ活動を行う団体(運動部活動を含む)に所属していた経験があるかを尋ねた。全体では「小学生のとき所属していた」のは42.7%、「中学生のとき」は34.8%、「高校生のとき」は19.0%であった(図表割愛)。

図表 5-1 で、現在の母親の子どもに対する期待別にみると、「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」と期待する母親は「小学生のとき」53.7%、「中学生のとき」47.5%、「高校生のとき」30.9%と、他の群に比べてスポーツ活動をする団体に所属していた比率が高い。自身の子どもの頃のスポーツ経験が、保護者となった現在の子どもへの期待と関連していることがわかる。

図表 5-1 母親が子どもの頃の所属経験(保護者の期待別)



注) 複数回答。

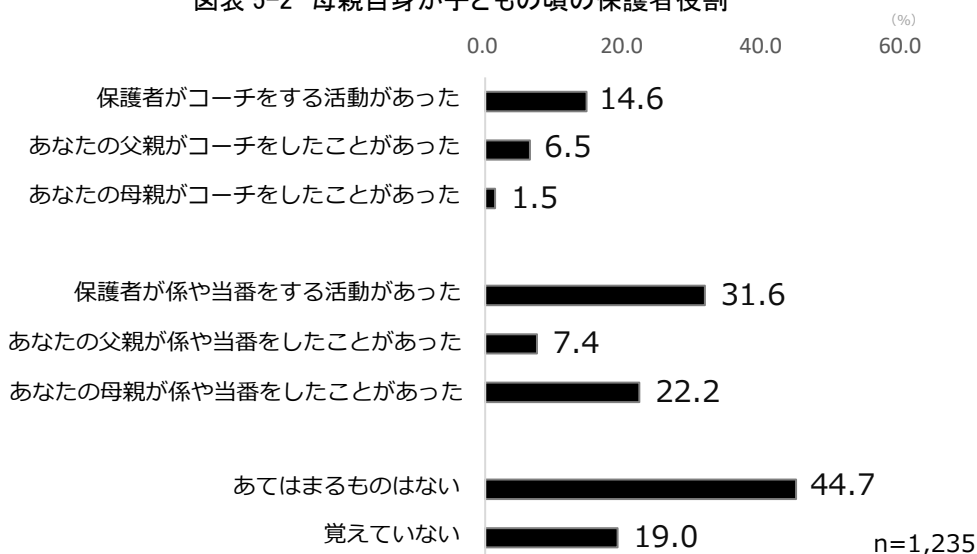


## (2) 母親自身が子どもの頃の保護者役割

2017年に実施した母親へのインタビュー調査のなかで、「子どものころ弟が野球をやっていた時に母親がかかりつきりだった」という声があがった。そこで、母親自身に子どもの頃を振り返ってもらい、本人やきょうだいがスポーツ活動をしていた場合の保護者の関与について尋ねた(図表 5-2)。

「覚えていない」が約 2 割いるものの、全体では「保護者がコーチをする活動があった」は 14.6%、「保護者が係や当番をする活動があった」は 31.6%であった。「保護者がコーチをする活動」では、「父親がコーチをしたことがあった」6.5%>「母親がコーチをしたことがあった」1.5%と父親のほうが多く、「保護者が係や当番をする活動」では母親 22.2%>父親 7.4%と母親のほうが多かった。過去の振り返りとして尋ねているため限界はあるものの、子どもたちの祖父母世代から、指導以外の関与は母親が中心であるという構造には変化がない様子がうかがえる。

図表 5-2 母親自身が子どもの頃の保護者役割



注 1)複数回答。

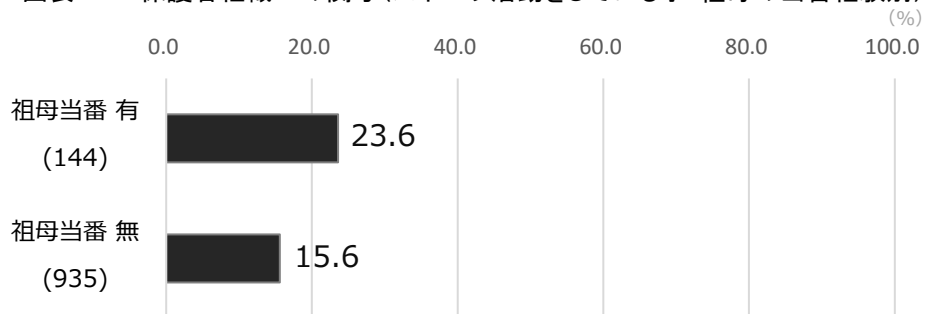
注 2)母親またはそのきょうだいが小学生の頃にスポーツ活動をしていた場合に尋ねている。

母親自身の過去の経験は、現在の子どもに対するサポートに影響するのだろうか。ここでは祖母(母親の実母)の当番経験の有無別による分析を行った。図表 5-3 は、祖母の当番経験の有無別に、子どもがスポーツ活動をしている母親が保護者組織に直接関わっている(図表 2-8 参照)比率を算出したものである。これをみると、祖母が当番等をしていたケースでは 23.6%、していないケースでは 15.6%と、祖母が当番を経験していた群で、母親も当番等をしている比率が高い。

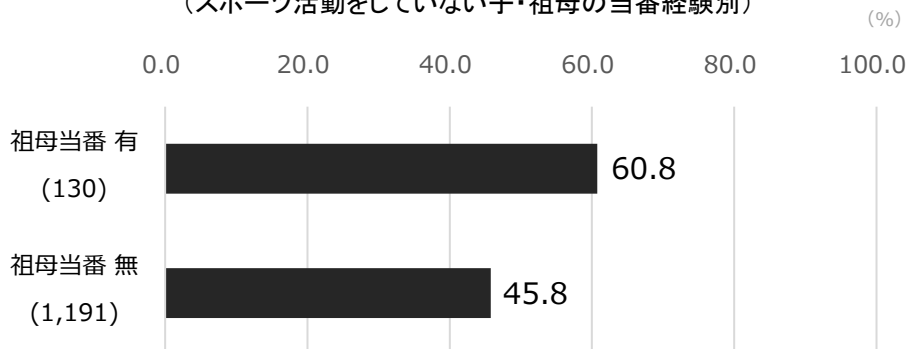
一方で、子どもがスポーツ活動をしていない母親について、「保護者の係や当番の負担が大きいから」を理由にあげた比率を祖母の当番経験別にみると、祖母が当番を経験していた群で 15 ポイント高い(図表 5-4)。

祖母の当番の有無における n 数に偏りがあるため一般化するのは難しいが、祖母世代の経験は母親世代に影響を与え、子どものスポーツ活動への期待・負担感などにつながっていることが推察される。具体的なメカニズムの解明は今後の研究課題のひとつといえるだろう。

図表 5-3 保護者組織への関与(スポーツ活動をしている子・祖母の当番経験別)



図表 5-4 「保護者の係や当番の負担が大きいから」の比率  
(スポーツ活動をしていない子・祖母の当番経験別)



注)子どもがスポーツ活動をしていない理由。「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## 2.6 保護者の当番制や人間関係に対する思い

最後に、子どものスポーツ活動における保護者の当番制、保護者どうしや指導者との人間関係について、心配な点や課題だと思ふ状況について尋ねた自由記述をみてみたい(図表 6-1)。「特にない」「わからない」「関わっていない」「当番がない」「問題がない」等の具体性のない記述を除き、何かしら意見が書かれていたのは 1,376 件であった。属性別にみると、高学年の子どもの母親、スポーツ活動をしていない子どもの母親がより多く記述していた。

当番への負担感のイメージから、そもそも当番制のあるクラブを敬遠する声や、当番内容に関する疑問や不満が多くみられた。また保護者どうしの当番の負担量の違いから生じる不公平感や人間関係への不安もあった。一方、少数ではあったが当番制があるものの良好な人間関係を築いているという意見や、やれる人がやるよりも当番制のほうが平等という意見もみられた。

図表 6-1 保護者の当番制や人間関係に対する思い

カテゴリー	回答
負担感	お茶当番や、大会会場への保護者の送迎は面倒なので、保護者の関与しないものをえらぶようにしている。
	子どもにスポーツをやらせたいと考えた時、保護者の負担があることは多少は仕方ないと思うが、それが大き過ぎて続けさせたくても続けられないのは問題があると思う。いろいろな競技に色々な選択肢があれば良いと思う。
	すべて含めての金額にしてほしい。当番や送迎など他に兄弟がいたりすると、とてもじゃないけど時間がない。
	会費を支払っているのに、保護者の負担が多すぎる。手ぶらで観戦に行けるようにしてほしい。
	我が家の方針としては、子供が楽しくスポーツに関われたらそれで満足なのですが、すでに所属している保護者の方々の目も厳しく、当番制も初心者にはしんどい部分もありそうなのでもっとフランクに始められるクラブが増えたらありがたいと思っています。
	無駄は減らし、外注できるところは極力外注し、あくまでも子供のための活動として、保護者同士は対等でドライな関係であるべき。
	自分の家の子供のことならばやるが、他の家の子供の面倒(送迎・練習付き添いなど)まで見なければいけないのは、とても負担な上に、万が一事故などがあつた場合に責任を取れないから絶対にやりたくない。
	部費を払っているのにコーチの弁当・お茶を用意する当番があつて驚いた。質素な弁当だと子どもがレギュラーから外されるのでは?と心配して豪華な弁当を用意する保護者がいて揉めたこともあつたそうで、呆れた。子ども達を車で送迎する当番もあるそうで、運転免許を持っていない自分には無理だと思った。
	母子家庭の方も参加しやすいなど、理解が必要。
	母親ばかり負担が来るのもっと自由に活動出来たらいいなと思います。
不公平	当番制はないほうがいいが、それでは少年団が成り立たないというジレンマを感じる
	やる人とやらない人の差が激しいので不公平感が生まれやすい
	共働きだから協力できないとか、専業主婦だからできるとか、一概に言えず、それぞれ家庭によつても事情があるため、常に平等にできるとは言えないと思う。
人間関係	大会時の手伝いなどは決まった保護者だけに負担がいかないように考えてほしいと思う。少しでも謝礼などがあればやってもいいと思う人が増えると思う。
	LINEなど連絡が取りやすい分トラブルも起こりやすそう
	いろいろな保護者があるので、意見が合わなかったり新しく人間関係をきずくのは大変
感染対策	以前からクラブにいた親が変に力を持っている場合、その人に嫌われてはならないなど、面倒なことがある。子供の上達を純粋に見守りたいだけなのに、親同士のいざこざに悩まされてしまい、通わせるのが嫌になる。
	気が合う人がいるかどうかわからないのは憂鬱。また、役割を分担する際の駆け引きが苦手なので、それも憂鬱。できれば、任せきりにできれば良いと思っている。
	コロナの事があるので当番制にせず各自でやれば良いと思う
好意的意見	試合などの際の配車担当などが、コロナの影響で非常に難しくなっていると思う。
	関係がとても良好で、みんなで助け合つてやっている。子どもたちは、東京都では優秀な成績を収め、次の関東大会めざして練習中。子どもたちの頑張りをみていたら、親も協力したい気持ちが自然と出てくる。課題は、いまのところみあたらない。
	子供のためなら当番制なども必要なことでもあるし、やりがいがあると思う
その他	当番制は平等だと思うのでよいと思う
	親と指導者・子供との相性や関係次第では、エゴ崩壊があつたり、感情的になりそうに嫌。子供の能力が高くて、指導者との相性がイマイチだったり、親が当番を率先してしないと、試合に出してもらえなそう。
	当番制や保護者の係が嫌で子供にそのスポーツをさせたくない保護者が増えているという理由で所属しているクラブも保護者の負担を減らそうと当番を廃止するようになりました。親としては負担が減り楽になりましたがその分練習への参加や手伝いが減り保護者同士の集まりや会話する機会も減りLINEでの連絡ばかりになったことは少し寂しいです。

注)表記・表現は基本的に原文(回答)のまま引用している。